
さよならキャット・スイーツタイム

京本 葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならキャット・スイーツタイム

【Nコード】

N8869V

【作者名】

京本 葉一

【あらすじ】

互いに惹かれあい、恋人となった理香と進一。月日が流れ、理香は舞台女優として成長するために忙しい日々を過ごしていた。理香の活躍を望みながら、なにも手伝うことができない無力さを感じる進一。会えない日々がつづき、進一は空しさをつのらせる。理香もまた、進一との距離を感じて不安を抱きはじめていた。そんな二人の前に、キャラメル色の猫があらわれる。スイーツを食べるために、どうにもならない関係に、変化をもたらすために。

0 理香とシヨコラ

シヨコラを食べて後悔したのは初めてだった。

理香は小さく吐息をもらして、テーブルのうえに財布をのせる。進一と約束したときは、もうすこし財布に厚みがあった。駅で別れたときも、新装オープンした店の前でボンボンシヨコラたちと出会ったときも、もうすこしだけ重かったはず。

理香は悲しげに首をふった。
どうしてこんなことに……と、考えるほどに頭をかかえこむ。

二人の記念日。

はじめての贈りもの。
忘れられない一生の思い出。

プレゼント交換をひらめいたときは、窓から射し込む朝の陽光ひかりがスポットライトにみえた。

ふかく考えることもなく、三時間後には進一にきいている。
「ねえ。十回目のデートのときに、プレゼント交換なんてしてみない？」

あくまでも、かるい感じで。
なんでもないように気楽な感じで。

天を仰いでうなだれて、理香は頼りない財布をみつめる。
突然の提案に戸惑ってはいたけれど、進一は受け入れてくれた。
いまさら約束は取り消せないし、取り消したくもない。でも、仕送りがくるまでデートを延期するのはイヤだ。美咲や樹里さんなら援助してくれると思うけど、ふたりにもあまり頼りたくはない。ああ、

けど進一の喜んでくれそうなプレゼントは贈りたいし、記念すべき十回目のデートは一生の思い出になるようにしたい。

理香は財布から視線をそらして、ボンボンシヨコラの入っていた空のケースをみた。愚かさの象徴をながめながらマグカップを手にとり、しんみりとココアを味わう。口のなかに広がるやさしい甘さとあたたかさを感じて、ほっと息をついた。

よみがえるシヨコラの味わい。

魅惑的な幸せを思い出した口が、おもわず感嘆の声をこぼしていた。

理香は祈るように半身を伏せると、テーブルに頭を打ちつけた。

1 進一と時計

目が覚めて、携帯電話に手をのばす。

昨夜のメールをもう一度、あるいは、新たなメールに期待して。

奇跡を期待するほどの信仰心はないが、祈るほどの間もない。

現実はあるけなく、液晶画面に表示される。

今日は、何も無い一日。

進一は手にした携帯電話をもとの場所より遠いところに置いた。

腕を伸ばし、指先を駆使して遠ざける。距離があるほど正解のような気がして、ベッドを買わずに良かったと、そんなことを思ったりもした。

寝返りをうって、携帯電話に背をむける。

暇な休日は二度寝から始まるものだ。布団を頭からかぶった。そのうち息苦しさを覚えたかもしれないが、そうなる前に疑問が浮かんだ。

昨夜、メールの返信、したか？

思い出せない。布団から顔を出して、仰向けになって記憶を探った。

理香のメールに気落ちしたのは覚えていて。そのあとで返信をしたような気がするものの、どうもはつきりしない。

天井を眺めているよりは、送信記録を見たほうが早いだろう。

考えをあらためて、ふたたび携帯電話に手をのばした。そんなはずはない、届かないはずはないのだと、少し意地になって手を伸ばしてみたが、指先がわずかに触れるだけだった。

あきらめて、布団をめくる。

ささやかな冷気を感じて少し身体が縮んだ。勢いをつけて起き上がり、手早く携帯電話をつかまえる。あとは送信記録を見るだけだったが、確認するまでもない。つかんだときに思い出していた。ほっとして、ため息が出る。

(いいよ。 また次の機会にしよう)

そんな言葉を昨夜も理香に送っていた。

当初の予定は何の問題なくキャンセルされて、理香は今日も稽古場へ向かうだろう。

心配することは何もない。

ただ、今日も会えないというだけだ。

進一は携帯電話から視線をうつして、黒いブラウン管テレビの上に置かれた時計を見た。

丸い形をしたアナログ時計で、大きさは十五センチほど。淵はグレー、なかは黒く、銀色の数字が十二個ならび、銀色の針が七時前を示していた。

コツコツと動く秒針が、淡々とした乾いた音を響かせている。

進一は時計をながめたあと、また布団のなかへ戻った。

静かな部屋のなかで、淡々とした響きだけが聞こえる。

やけに大きな時計の音は、目を閉じればなおさら響いて、布団をかぶっても聞こえてきた。

消えそうにはなく、眠気を誘うものでもないらしい。

静かな部屋のなかで、進一は長い朝を過ごした。

2 進一と猫

時計が十時を示していた。

布団から出た進一は、固まった身体をゆっくりと動かして、黒いブラウン管テレビのまえに立った。

変わることはない時計にふれて、ざらついた感触に、進一は苦笑する。

指先についたホコリを払えば、白いテレビがそこにある。

ホコリを積もらせた家具を前にして、見えないふりにも限界があるらしい。

予定を失った休日。

部屋の掃除でもしようか。

まわりをきれいにしたところで、気分が沈むなんてことはないはずだ。

進一の部屋は、二階建てアパートの一階、角部屋にあたる。

六畳の畳部屋、四畳半のダイニングキッチンに、バス、トイレつき。

駅から徒歩で十分ほど、坂道をのぼった、周辺がすこし寂しいところであり、静けさと部屋代は申し分ない。

六畳の部屋に窓はふたつ。

ベランダに出る大きな窓が西側にあり、小さな窓が北側についている。

西日が射し込むため、夏はかなり暑い。小さな窓の外側には空っぽの犬小屋が放置されており、かつては柴犬の臭いが流れ込んできた。

六畳間には、折りたたみ式の小さな黒いテーブル、一メートル丈

の本棚がふたつ、黒いテレビ台に黒いブラウン管テレビ、開けにくいタンス。キッチンにはそれなりの電化製品があり、ダークブルーの小型冷蔵庫、同系色のレンジ、グリルがついた黒色のコンロ、ステンレスラックには三合まで炊ける炊飯器が置いてある。

大学生活も四年目。

一人暮らしをはじめて三年が過ぎていた。

入居したときに比べて、天井のシミは数を増している。畳は色あせて、白かったはずの壁紙も薄汚い。

ふと気がつけば、雑然とした部屋で暮らしている。

主要な家具に変化はなく、配置すら変わっていないが、ずいぶん部屋は狭くなった。物は確実に増えている。収納スペースには、友人である孝雄が持ち込んだ釣竿や昆虫採集セット、UFOキャッチャーの景品などが場所を占めていたりする。

この際、捨てられるものは捨てようか。

つらつらと考えながら、進一はベランダに布団を出した。曇り空ではあったが、干しておいたほうが掃除はしやすい。布団をパスパス叩きながら、どこからやろうかと片付けプランを考える。

結果、食事をかねて冷蔵庫の中から片付けることにした。

炊飯器のなかに、ご飯が二合半ほど残っている。冷凍しておくつもりだったが、食べたとしてどうなるわけでもない。たっぷりと消費するなら、焼き飯がいいだろう。

萎びたネギと賞味期限をすこしばかり過ぎたベーコン、残っていた三個の玉子をつかう。

厳選した他の食材は、しかたなくゴミ袋にいれた。

フライパンの扱いは慣れたものだ。米粒がパラパラになるまで炒める。大きくカットした具材がご飯と混ざり、彩りもいい。味付けは塩コショウと醤油で間違いないが、醤油風味というよりは、醤油味の焼き飯ができあがった。

悪くない一品を食べ終えたあと、インスタントコーヒーを飲みながら休息した。

「やっぱり食べると疲れるよな」と、一人で納得しながら洗い物を終えて、ようやく分別作業にとりかかる。

二度と読まないと思われる本や雑誌、着ることのない冬物衣類、サビが浮き出ている簡易ガスコンロなど。

作業は順調にすすんだ。

ダイニングキッチンでは、燃えるゴミ、燃えないゴミ、資源ゴミといったゴミ袋が占領していった。

不要なものはひたすら処分したが、例外もある。

「犬小屋も、いいかげん処分しないとな」

そうつぶやきながらも、気が進まずに捨てられない。

孝雄が置いていった釣竿や昆虫採集セットも残ることになった。

「あいつは、いずれ帰ってくるだろう」

友人との再会を期待しつつ、クレーンゲームの景品だけは迷いなく捨てた。

片付け作業を終えて、今度は掃除機をかける。壁際でころがるホコリの塊をはじめ、手当たりしだいにホコリを吸い取っていると、排気の臭いが部屋にこもった。窓を二つとも、網戸まで全開にして、ついでに窓枠の溝もきれいにゴミを吸い取る。

ていねいに掃除機をかけたあと、ゆるいTシャツを手にとった。捨てる前のTシャツを、雑巾として利用する。窓の汚れも気になるが、とりあえず家具にもったホコリを拭き取りたい。

シャツを片手に黒いブラウン管テレビの前に立ったとき、妙な音が聞こえた。

ゴトンという軽い音。右側、小さな窓の方から。何気なく窓のほうを見やる。

と、またゴトンという音がして、何かが窓枠に飛びのってきた。

薄っすらと縞模様のあるキャラメル色の毛並み。大きくて、でっぴりとした身体。

ゆらゆらとゆれる、やたらと長い尻尾。

桃色の鼻に白いヒゲ。

蜂蜜色の瞳。

見知らぬ猫がそこにいた。

キャラメル色の猫は、当然のごとく窓枠でたたずみ、長い尻尾をゆらしている。蜂蜜色の瞳を気だるそうな半眼にして、部屋の様子をうかがっていた。首輪はなく、野良猫と思われるが、人間に対する警戒心はまったく感じられない。

猫は蜂蜜色の瞳をいっそう細めると、ためらいなく部屋のなかに入った。

窓枠に飛びのったときとは違い、ドスツという、重たい音がした。

3 進一と理不尽な猫

見知らぬ猫の、突然の訪問。

驚きはしたが、犬派動物好きの人間にとって、うるたえる事態ではない。

「大人しくしていれば、残り物ぐらいやるさ」

進一はそう言って、キャラメル色の猫を歓迎した。

猫は桃色の鼻をヒクヒクさせながら、部屋のなかを見回している。進一は猫を見守りながら、部屋にある残り物を考えてみた。ご飯はまだ残っているが、冷蔵庫はさっぱりとしている。食材はすべて胃袋か、ゴミ袋のなかだ。塩と砂糖と醤油と油、あとはインスタントコーヒーぐらいだろう。

「さて、どうしたものか……」

進一が悩んでいると、猫は部屋の真ん中でごろんと落ち着いた。

決断は早かった。

進一は部屋で毛づくろいをする猫を残して、自転車で駅前のスーパーに向かった。下り坂をゆくスピードがいつもより速いのは、雲行きが怪しいからではないだろう。

キャットフードを見てまわったが、猫がいなくなっていれば無駄になる。ツナ混ぜご飯でもやろうと、ツナ缶を選んだ。夕食のために唐揚げ弁当、特売の大型プリンも三個買った。

猫はちゃんというだろうか。

進一は力強くペダルを踏みこみ、上り坂を急いだ。

そして呼吸を整えながら部屋に戻ったとき、ズタズタに破られたゴミ袋を見ることになった。

期限を過ぎた福神漬の臭いに呼吸を乱しながら、床に散らばった生ゴミを見わたす。食い荒らされたようには見えないが、あの猫

がやったのは間違いないだろう。

進一は頭をふって考えるのをやめた。床ばかり見ているも仕方がない。

頭を切り替えて顔をあげると、視界にキヤラメル色の猫が入った。六畳部屋の真ん中で身体を横にしながら、気だるそうにこちらを見ていた。

大人しくしていれば残り物ぐらいはやる。

猫はそれを中途半端に理解したのか。それとも理解したうえで無視したのか。

進一は頭を振って、唐揚げ弁当とプリンを冷蔵庫に入れた。

散らばった生ゴミを片付けて、ツナ混ぜご飯をつくり、猫にやる。茶碗はすこし離れたところに置いた。キヤラメル色の猫は文句を言うこともなく動き出し、茶碗に顔をつつこんで食べはじめた。

猫もなかなかいいものだ。

食事風景を見ていると、複雑だった心境も和らいでくる。

雲行きが怪しいことを思い出して、布団を取り込むことにした。多少はふつくらとした布団を部屋の中央でたたむ。猫が見ていることに気づいて、食べ終えたのだろうかとう近づいた。猫は見事に完食しており、進一は茶碗を回収してキッチンで洗う。

片付けて六畳間に戻ると、猫は布団のうえで落ち着いていた。猫が一番いい場所を選ぶと聞いたことがある。これが猫なのだろうと、そう思うことにした。

そつと、猫に近づく。

やわらかそうな身体にふれてみたくて、静かに手をのばした。猫は蜂蜜色の瞳をこちらに向けて、前脚を片方だけ上げる。なんとなく、瞳の輝きが危うさを帯びていた。進一がゆっくり手をひくと、猫もまた前脚を下ろし、気だるそうに瞳を閉じた。

これが、猫なのか？

進一は悩んだが、いままで猫と生活をしたことはない。答えの出

しよつがなかつた。

布団のうえで丸くなった猫をときどき見ながら、家具につもつたホコリを拭き取ってゆく。広い部屋ではなく、家具も少ない。外がまだ明るいうちに、窓をきっちり磨き上げて、部屋はそれなりの美しさを取り戻していた。

すべてを終えた進一は、あらためて猫に目をやる。

達成感は自信となるもので、進一の眼差しにはそれなりの力があつたのだろう。賞賛を求める視線を受けて、猫は蜂蜜色の瞳をのぞかせた。猫は大きなあくびをして、身体を横にたおし、全身で大きく伸びをする。そして、あきらかに進一の顔を確認したうえで寝返りをうち、背を向けた。

静かだった。

アナログ時計が、淡々としたリズムで乾いた音を響かせている。耳をすませば、かすかに猫のいびきも聞こえる。

進一は布団を引きずって移動させ、折りたたみ式のテーブルを出していた。砂糖たっぷりコーヒーを飲みながら、ていねいに時計を磨きあげる。

丸い形をしたアナログ時計。淵はグレー、なかは黒く、銀色の針と数字がならんでいる。大きさは十五センチほどで、幅は三センチもない。動力部分は裏側についており、単三電池一個で動いてくれる。不安定な形をしたプラスチック製の軽い時計は、裏側にはめ込まれた小さい板によって支えられ、すこし傾いて立つことになる。

値段どおりの、安っぽい時計。

進一は磨きあげた時計をテレビのうえに置いた。
理香から贈られたはじめてのプレゼントは、いつもの場所に落ちていた。

形に残る理香のプレゼントは、この時計しかなかった。

お互いのプレゼントは共通の楽しみであるスイーツに限定されている。そうしようと、理香が提案した。失敗を取り戻そうと樹里に相談し、あらためて基礎化粧品セットを贈ったのが致命的だったなと、進一は後悔している。どこかの演出家が語った「写真に頼るな心に刻み込め」という言葉に感動してしまった理香は、進一に写真もとらせてはくれない。すぐに見ることが出来る理香の残像は、いつも目にする時計だけだ。黒いブラウン管テレビのうえで、すこし斜めに立っている時計だけが、いつも理香を思い出させる。

きれいになった時計をながめて、進一は苦笑する。

自信に満ちた丸い瞳。はっきりした顔立ちに浮かぶ勝気な笑み。

明るく染めた茶色い髪は、いまま毛先を遊ばせたショートヘアに違いない。

アクションもできると豪語するだけあって、スリムな肢体に、健康的なツヤのある肌。

カラフルなファッションに負けることなく、その姿、その横顔は、かっこいい女性だ。それでいて、まっすぐに見せる笑顔は、なんとなく幼さを感じさせる。

いまでも忘れない。理香と二度目に会ったときは、よくもまあ、こんな可愛い子を誘うことができたなと自分にあきれた。はじめて会ったときは、美咲さんという美女の存在が脳を麻痺させていたのかもしれない。それとも、分相応というものを忘れるほどに、惚けていただけか。

進一はため息をもらし、かるく頭をふった。

理香は順調に自分の道を歩んでいる。もちろん、それは嬉しい。舞台上で魅せる姿は、誰よりも輝いている。理香がもつとも綺麗になるのは、舞台の上でスポットライトを浴びるときだ。いまはもう、遠くで見ていることしかできないけれど、いまでも応援する気持ちに変わりはない。

「邪魔だけは、したくない。」

壁に背中をあずけて、小さく笑う。

大切な人を支えたいのに、なんの力にもなれないのは、気分が滅入る。それはわかっていた。そのことは、わかっていたつもりだった。でも、本当に気分が滅入るのは、そうじゃない。

いまになって、ようやくわかったような気がする。

いままでずっと、支えていたわけじゃなかった……。

進一が感傷にひたっていると、ボスツ、ボスツ、と音が続いた。間違いなく猫だ。

今度は何だと、進一は猫を見る。すると、やたらと長い尻尾が布団を叩いていた。どうやら脚先もビクビク動いている。

夢でも見ているのかと、そっと猫に近づく。

進一が見守るなか、猫は瞳を閉じたまま身体をもぞもぞと動かし、横にひねり、仰向けの状態で動きをとめた。人間を前にして、じつに無防備な姿。人間まで力が抜ける。

進一は、猫のだらしない姿をじつとながめた。

「お腹のほうは、背中よりも白っぽいんだな」

と、どうでもいいことをつぶやいて、頭をかきながら少しだけ笑った。

ゆるみきった猫の寝姿を見ていると、はた迷惑な行為も、ふてぶ

てしい態度も、まあいいかと思えてくる。

どうにもならない自分の弱さも、なにもかも、笑って許せるような気がした。

スーパーで買ってきた唐揚げ弁当を冷蔵庫から取り出して、電子レンジであたためる。猫がどう反応するか気になったが、予想に反して大人しく眠っていた。テレビをつけてチャンネルをまわすと、インドらしき映像が流れていた。その番組を見ながら食べることにした。唐揚げをつまみながら、芸人の仕事は大変だと感心もする。孝雄が映りこむという奇跡はなかったが、番組を楽しみつつ食事を終えた。

猫は最後まで大人しかった。

ずっと布団のうえで眠り込んでおり、寝ているだけなら無害な存在だ。無愛想な態度もなく、その姿は可愛らしくもある。

進一は猫をながめて、頭をかきながら頬をゆるませる。

とてもいい感じで、食後のスイーツを食べられる気がした。

進一はキッチンに移動して、弁当の容器をゴミ袋に片付けた。

スプーンを片手に冷蔵庫からプリンを取り出して、部屋にもどると、テーブルのうえに猫がいた。

進一は声こそ出さなかったが、身体はビクツと震えて止まった。

ついさっき感じたはずの愛らしさは微塵もない。いるはずのないものが、いつのまにかそこにいる。ホラー映画によくあるパターンだと思いいたり、同時に嫌な予感がした。ささやかな幸せであるスイーツタイムが、危険な状況にあるような気がした。

キヤラメル色の猫が、じっと見ている。

進一は、ひとまずプリンを戻そうかと考えた。インスタントのコ

ーヒーでもつくり、平穩を取り戻してからプリンを食べようかと、一歩うしろに下がった。

しかし、猫はすっとテーブルから下りる。

考えすぎだと、進一は頭をふった。テーブルのうえにプリンを置いて、畳に腰を下ろす。

猫もまた、進一に注意を向けつつ身体を伏せた。

猫って、プリンなんか食べるのか？

進一は畳に伏せるキャラメル色の猫を横目でながめた。

蜂蜜色の瞳が妖しい光を放っている。

長い尻尾がしなやかに地を払い、爪を研ぎながら伏せる身体は、なぜか引き締まって見えた。

進一は、キャラメル色の獣にプリンの半分を捧げること、ささやかな幸せをかるうじて確保した。

猫はプリンを食べ終えると、小さな窓の下に移動して、進一をじっと見る。進一が窓を開けると窓枠に跳びのり、犬小屋のうえに下りた。

ゴトンという音の鳴らして、猫は暗くなった世界へ消えていった。

4 理香と猫

ドアの前に、キャラメル色の猫がいる。

理香は立ち止まり、いつもと違う光景に理由をもとめた。

なんで私の部屋の前にいるんだろう。この階で猫を飼っている人はいなかったはずだ。首輪もないし、野良猫かもしれない。でも、どうやってここまで？　こっつて三階だし、マンションの入り口はオートロックなんだけど……。

疑問を抱きながらも、理香は猫に近づいていった。

気になるけど、とにかくいまは、部屋に入ってくつろぎたい。

猫は蜂蜜色の瞳で理香を見ていた。注意は向けているようだが、動く気配はまったくくない。ドアの前に座り、やたらと長い尻尾をゆらゆらと揺らしている。ふくよかで大きな身体が、ドアを開ける邪魔をしていた。

「ちよつとごめんね」

傷つけないように、そつとドアを開ける。

と、猫が動いた。

すつと動き出した猫は、わずかにできたドアの隙間から、するりと部屋に入る。理香の戸惑いをよそに、何のよどみもなく玄関から奥へと進んでいった。

なんで入るの？　しかも、私よりさきに。

急に荷物が重くなる。

なんだかわからないけれど、入ってしまったものはしょうがない。理香はあきらめてドアを閉めた。

猫のことはわからないし、そもそも動物には馴染みがない。動物にアレルギーをもつ親がいると、ペットを飼うことはもちろん、近所の犬や猫にもさわらないでほしいと言われてしまう。さわった動物といえば、進一がしょっちゅう世話をしていた柴犬のタローくらいだ。雨に濡れたときの臭いは忘れようもない。かわいい子だったけれど、臭いのはダメ……。

……猫は、どうなんだろう？

ふっと思いたち、不安がよぎる。

それに、猫ってなにをするんだろう？

いつもより、ブーツを脱ぐのに時間がかかる。

猫は服や壁紙を傷つけるのかもしれない。ベッドのうえで跳びはねるのかもしれない。衣裳部屋と寝室のドアは閉めたはずだから、そこを荒らされる心配はないと思うけど。

理香はブーツを脱ぎ捨てて、いそいで猫のあとを追った。

ふくらんだ不安は、あっさり消滅する。

キヤラメル色の猫はキッチンにいた。冷蔵庫のまえで、桃色の鼻をヒクつかせている。

理香はほっと息をついて、ダイニングテーブルのうえに荷物を置いた。

お腹が空いているのかな。

猫ってなにを食べるんだろう。

エサをあげたら居ついちゃうかも。

猫をながめていても、考えがまとまらない。とりあえず衣裳部屋に入り、ヨガもできるリラックspanツと長袖シャツに着替えた。

しかし、衣裳部屋から戻ると、猫は冷蔵庫のまえから消えていた。あたりを見回すと、寝室のドアが開いている。

さっきまでドアは閉まっていたはず……あの猫が開けた？ ドアのレバーを下げたの？

おそろおそろ、寝室のなかを確認する。

猫はベッドのうえからこちらを見ていた。ためらいながら、理香がゆっくり近づくと、猫はふたたび動き出す。ベッドの中央から枕元に移動して、そのまま出窓に跳びうつった。

猫が落ち着いたのは、出窓に置かれていた、時計のとなりだった。目覚まし機能もついていないのに、いつも枕の近くに置いてある時計。引っ越しをしても、置き場所だけは変わらない。グレーとブラックの色合いは好みでもなく、安っぽい時計ではあるけれど、理香はそばに置きつけていた。

夜の街を見下ろしながら、猫はやたらと長い尻尾を大きく振りまわす。勢いのついた尻尾がぶつかり、プラスチック製のアナログ時計は、いともたやすく倒された。

理香はあわてて出窓に近づき、時計を抱えあげる。

詫びることもないキヤラメル色の猫に視線をむけた。その態度からして、この猫が思い通りに動くとは思えない。ふくよかな身体つきが、さらに不動のイメージを強化させる。

どうしようかなあ、この猫。

考えようにも、知識が無さすぎる。

理香は考えるのをやめようとして、ふっと思いついた。

そっだ、進一に聞こう。

理香は時計を抱えたまま寝室をでると、ダイニングテーブルにおいたバッグから、携帯電話を取り出した。鼻歌を歌いながら、時計

をやさしくテーブルに置くと、薄型テレビの前にあるソファをめぐらさず。二人で座れるクリームレモンのソファに、どっと身体を沈めて、携帯電話を両手で操作しようとして、理香は固まった。

進一への電話をためらうのは、はじめてではなかった。

いつからだろう。

夜中に電話をかけるのは、たしかに迷惑だと思う。でも以前なら、迷惑なんて思いつく間もなく進一に電話をしていた。夜中の二時でも三時でも、平気で朝まで話し合っていたのに……。

携帯電話を操作して、メールの受信ボックスをみる。

(いいよ。また次の機会にしよう)

そんな進一の返信メールが、液晶画面にあらわれる。

いつからだろう。

(今度、いつ会える?) って、聞かれなくなったのは……。

進一と最後に会ったのは三週間も前だ。よその劇団にも呼ばれるようになって、舞台の仕事はずいぶん忙しくなった。練習時間も大幅にふえて、デートの約束をキャンセルしたのも、一度や二度じゃない。進一がいつ会えるのか聞かないのは、当たり前なのかもしれない。引越して、電車で二駅の距離まで近づいたのに、進一と会える時間は、ずっと少ない。

いつからだろう。

ときおり進一が、遠くを見るような眼差しを向けるようになったのは……。

異音が響いて、理香は過去から引き戻された。

なにかが落ちたような、ドン、という響き。

すぐに猫が思い出されて、理香は寢室のほうへと注意をむける。

寝室から、猫がとつとつ歩いてきた。ソファへまっすぐ向かってくる。うろたえる理香のことなど気にもとめず、猫はそのままソファにあがり、理香のとなりで丸くなった。人間に対する敬意もなければ、警戒心もない。瞳を閉じた猫の身体は、ゆったり膨らんで縮んでいる。こんな姿に、敵意があるとも思えなかった。

理香は静かにソファを離れて、携帯電話をテーブルに置いた。

5 理香と無抵抗な猫

理香は温めた海鮮焼きそばと生春巻きをテーブルにならべた。

夜食はいつも夕食の残り物ですませている。劇団仲間に感化されて、外食での食べ残しを平気で持ち帰るようになっていた。

夜食を食べてもスタイルは変わらない。

小腹を満たすためであり量は多くなかったが、たとえ多くとも変わらないと信じている。

太らない体質に生んでくれたことを、理香は何度となく両親に感謝しており、裕福な家庭であることにも感謝が絶えなかった。劇団員の多くは経済的に苦しく、彼らの姿をみているだけで、自分の恵まれた生活に手を合わせたくなる。仲間に食事を奢ることができるのも、豊かさのあらわれだ。いくら哀れさに心を痛めても、ないものはあげられない。

「感謝しないとね。少なくとも、勘違いはしないように」

樹里にそう言われつつけて、理香も自覚はしている。劇団の仲間たちから絶大なる支持を集めているのは、カリスマ性があるわけでも演技力が優れているからでもない。入団当初から頻繁に、彼らの食生活を援助してきたことが大きいのだと。だからこそ、安さが売りの中華料理店は、今日もまた理香の財布からお金を吸い上げて、貧乏劇団員たちの飢えを満たしていた。

理香が食事を終えるまで、猫が起きることはなかった。

「お腹が減っているわけじゃないんだ」

理香はひとりで納得して、猫よけのためにキープしておいた海鮮焼きそばのエビをふたつ、口にいった。

ぷりぷりのエビを噛みしめて味わい、食器をもってキッチンに向

かう。

食器を洗い、ココアのためにお湯を沸かし、カップとケーキ皿を棚から取り出した。

ゆつくりと、幸せがこみあげてくる。

お取り寄せで注文した三種類のケーキは、指定した時間のとおり、外出前に届いた。

素敵な一日を締めくくるにふさわしい、豪華なスイーツタイムにしよう。そう思って取り寄せたのに、進一とのデートを流してしまった。三種類ものケーキはまったくふさわしいものではなく、なんだか寂しくなって、景気づけに食べてしまっ、それでも、三分の一は冷蔵庫に残してある。

「本日のスイーツタイム。わたくしは苺のショートケーキをいただきます」

約束された幸福をまえに、ついには決意表明。

ケーキセットをそろえて、満面の笑みを浮かべてテーブルについた。

まずはココアをひと口味わって、ほっとひと息。スイーツモードに入る。

フオークでやさしく、たっぷりとクリームのついた苺をすくい上げて、そっと口もとにつれてゆく。

そのとき、何か異様な光を見た気がして、理香は周囲を探った。

猫がソファアのうえに立ち、こちらを見ている。

蜂蜜色の瞳が、やけに強い光を放っているように感じる。

そんな、まさか。

理香はかるく頭をふって、苺を口のなかに入れた。

苺の酸味が果汁とともに広がり、甘いクリームと合わさって幸せを協奏する。あとを引きついだ苺のさわやかな甘味が、さらなる幸せを呼び込むために理香を駆りたてる。

はずだったが、どうにも猫の視線が気になって仕方がない。

理香は悩んだあげく、小皿を取り出して、ケーキをすこし分けてのせた。

ソファーに近づいて、そっと猫の鼻先に小皿を差し出す。

瞬間、理香は震えた。

猫がクリームを舐めている。

さらにはスポンジケーキに食らいついている。

これまでの猫観をくつがえす猫の姿を目の当たりにした理香は、衝撃のあまり言葉を失い、さらにケーキを分け与えることをためらわなかった。

なんだろう、この親近感。

猫とともにケーキを食べ終えた理香は、ココアのカップを片手に、猫のいるソファーにすわった。

猫は脚をのびし、尻尾をむけて横になる。

臭くない？ 理香は顔を近づけて匂いをかいでみる。とくに不愉快さはなく、今度はそっと指でふれた。

あつたかい。

生命のぬくもり。

心地よくやわらかい感触を、右手全体で味わう。

手が隠れるほどの長さはない、キャラメル色の毛並み。お腹のほ

うは少し白っぽい。キャラメルソースを練り込んでゆくように、背中に向かって色が濃くなっている。よく見れば、うっすらと縞模様もわかる。

撫でながらココアを飲み干した。

立ちあがり、ささっとカップを洗って、すぐにソファへ座りなおす。

今度は指で、猫の背中をかいてみた。

背骨のライン、長い尻尾の付け根あたりをかくと、猫は身体をのばして小刻みに震える。

おもしろくてずっとやっていると、猫がソファに爪を立てた。

二人で座れる、お気に入りソファ。理香はあわてて前脚をつかんだ。攻撃されるかも、と考えたのは、つかんだあとのこと。緊張で身体が硬くなったが、猫の抵抗はなく、ソファと両手は事なきを得た。

理香は深々と息をつく。

安心すると、新たな感触が広がる。

なにこれ？ 肉球？

ぷにぷにとした感触には、なんともいえない感動があった。

はしゃぎながら揉み続けていると、猫は理香の手を振り払い、気だるそうに理香を見上げる。

さすがに嫌になったのかもしれない。

だが、それでも理香は肉球をもとめて、今度は後脚の肉球を揉みはじめた。

丸くなった猫の瞳は、ピュアな蜂蜜のように、透き通るような美しさで輝いていた。

キヤラメル色の猫は、ソファアで夜を明かした。

翌日、猫は理香とともに部屋を出て、一緒にエレベーターに乗り、ともにマンションを出る。

外に出たあとは、理香と反対の方角に去っていった。

見えなくなるまで猫を見つづけて、理香は稽古場へ向かった。

6 猫のプーター

ゴトン、という音が聞こえた。

進一は箸をおいて立ち上がり、小さいほうの窓から外を見る。

犬小屋のうえに、キャラメル色の猫がいる。

「また来たのか」

と笑って、進一が窓を開けると、猫は当然のごとく部屋に入ってきた。夕食の存在に気づいていたらしく、テーブルにのっていたマグロの刺身をためらいなく奪う。

「さすがだな。人がとっておいたスーパーの半額マグロをいきなり食べるのか」

猫はあきらかに進一を見たうえで、さらに一切れマグロを奪った。

このままではまずい、と進一も食事を再開する。

猫の狙いはマグロに限られていたらしい。箸でつかんだマグロは、爪をとがらせた猫に奪い取られた。

猫は刺身がなくなると、進一の向かい側でごろんと横になる。

だが、いっこうに眠る気配はない。

なんとなく、進一も予想はしていた。

こいつはプリンを狙っている。

進一はできるだけゆっくりと食事を再開した。猫の様子をうかがいながら、ご飯がどろどろになるまで噛み続けたりもした。「ごちそうさまでした」と合掌し、洗い物はいつも以上に精を出す。お湯を沸かして、砂糖たっぷりインスタントコーヒーをつくり、ふたたび猫に対してテーブルについた。

元の位置にもどり、コーヒーをすすりながら猫をみる。

猫の様子に変化はない。

蜂蜜色の瞳を気だるそうに向けて、「そんなフェイントが通じるとでも？」と言わんばかりの冷やかな視線を突き刺してくる。

進一は、すすったコーヒーマグに苦味を感じた。

この猫は知っている。

食後のプリンを知っている。

そんなはずはないと思いたいが、なぜか見抜かれている気がしてならない。

我慢比べをしても、勝てる気がしなかった。

「野性の勘か？」

進一は猫につぶやき、あきらめて冷蔵庫に向かう。

そして猫は、畳で爪を研ぎはじめた。

ゴトンという音を鳴らして、猫はどこかへ消えていった。

あいつはまた来るだろう。

プリンを狙い、捨てられない犬小屋を踏み台にして。

ふっと名前を思いついて、進一はキャラメル色の猫をプータローと呼ぶことにした。

プリン大好きプータロー。

ふざけた名前だと、進一は笑った。

ドアの前に、キャラメル色の猫がいる。

ピュアな蜂蜜色の瞳。ふくよかで大きな身体。しなやかで長い尻尾。ぷにぷにの肉球。

子どものころ、思いがけないプレゼントを見つけたときのように、理香は猫のそばに駆け寄った。

ドアを開けると、猫は当然だといわんばかりに部屋に入る。

五目炒飯を食べたあと、コンビニで買ったチーズケーキを猫と一緒に食べる。

ソファで過ごす、新しい幸福の時間。

「なんだろうね、この一体感は」

ささやきながら、ていねいに皿を舐めまわす猫の姿を見守った。残っていたチーズケーキをフォークで刺すと、猫は理香の取り分を見つめる。猫のみている前で、理香は最後の一口を放り込んだ。

猫が動いて、理香の太ももに前脚をのせる。

さらに身体全体をのせて、膝のうえで落ち着こうとした。

重たい。

けれど、嫌な気はしない。

理香はケーキ皿を脇において、猫の身体をやさしく撫でた。

この子に、名前をつけよう。

そう思ったときには、プーターローという名が浮かんだ。

ぷにぷにの肉球でオスだから、プーターロー。変な名前だけど、プーターローよりはいい。

両腕で抱えこみ、下腹部全体で猫を感じる。

「うん。君の名前はプータローだ」

眠ろうとする猫に語りかけて、理香はやさしい微笑みを浮かべた。

7 文恵と大自然研究会

解体間近といわれる旧校舎の一室に、文恵はとうとう足を踏み入れた。

入り口には「大自然研究会」と張り紙がある。場所に間違いはなく、間違いがないからこそ、どうしても歩みは慎重になる。

「文恵つてば、なに遠慮してんの。はようこっちおいでつて」

早紀に呼ばれて、文恵はいそいそと部屋のなかに入った。友人のほかにもう一人、文恵を待っている人がいる。大自然研究会の代表であり、「我が研究会唯一の良識」と早紀に語らせる人物が、文恵の入会手続きのためにわざわざ来ていた。

「それじゃあ、あらためて佐山さんにご紹介します。こっちが文恵、西園寺文恵です」

紹介しながら、早紀はけらけらと笑った。

「よろしく願います」

と文恵は頭を下げる。戸惑いながらも、安心していた。

佐山さんつて、なんだか優しそうな感じがする。悪い人には見えないし、そのあたりにいる学生よりも真面目で誠実そうだ。イメージとはだいぶ違う。どう見たって、怪しげな会の代表とは思えない。「こちらこそ、よろしく」

文恵の心境を知ってか知らずか、進一はずっと苦笑していた。

研究会のメンバーは、それぞれがテーマを決めて勝手にやっている。もともとは自然研究会という名称だったが、三年前に改名された。UFOや宇宙人、怪奇現象や神秘主義にまで研究対象が広がり、方向性が変わったことによる。ときに発表会があり、討論会もあるが、好きな者だけ集まればいい。とくに規定はなく、みんなが自由にやっている。ひたすら怪談話を集めているメンバーもいれば、その怪談話を聞くためだけに在籍しているものもいる。あえてメンバ

「の共通点をあげるなら、「世の中にはいろんなやつがいるんだなあ」と実感していることだろう。」

「みんながみんな変な奴と違うよ。あっち側とこっち側、ちゃんと二種類の人間があるから」

進一の説明に、早紀がけらけらと笑いながら口をはさんだ。確かにそうだと、進一も苦笑する。

「で、西園寺さんは、何かやりたいことでもあるの？」

「見たまんまですよ」

進一の問いかけに、早紀が答えた。

「見たままって……猫か」

「そうです。猫を愛し、猫を研究し、ときには猫を救出する」

早紀は最後まで言いきって、「そんな感じじゃんね？」と文恵に同意を求めた。

訂正することもないと思い、文恵はうなずく。どうして猫だとわかったんですか、などと聞くのは愚問だった。身に着けているものすべてに猫のイラストが描かれ、カバンには茶トラ猫のぬいぐるみがぶら下がっている。

「まあ、いいんじゃない」

と進一は笑った。

「ありがとうございます」

と文恵は頭を下げる。

進一は楽しげに笑い、となりでは早紀がけらけらと笑っていた。

柴田早紀は、文恵と同じ文学部で、同期でもある。入学当初から大自然研究会に所属しており、ずいぶん長い時間をかけて「なあ文恵って。文恵はこっち側の人間なんやから」と勧誘をつづけていた。

「どうです佐山さん。文恵って、なんかいい感じしてませんか？」

「まあね。さすがは柴田の友人だ」

「一条の兄さんも、きつと気に入ってくれるはずです」

早紀はケラケラと笑った。

「が、気に入ってもらいたくない文恵の心情は、いいものではない。にしても兄さん帰ってきませんよね。佐山さんがあかんですよ、人類飛来説を否定するから」

「それと孝雄が旅立ったのは無関係だ」

文恵の傷心などに気づくことなく、話は盛り上がっていった。

一条孝雄の存在は、文恵も知っている。

学内における抱かれたい男、恋人にしたい男ランキングでは、必ず上位にランクインされる。かつこいい人なのは確からしくて、一条さんが目当てで大自然研究会に所属している女性もいるらしい。にもかかわらず、本人は宇宙人など追っかけて、まわりの女の子には見向きもしない。ならば異性に興味がないのかと思えば、麗しいお嬢さまと付き合っているのかなんとか。その強力なコネで雪村製薬という大企業に就職が決まっていたとも聞いた。それなのに、半年ほど前、学内から姿が消えた。どこかに旅立ったのだという。理由はよくわからない。討論に負けたからだとか、恋人にふられたからだとか、地球を離れたとか。

ようするに、わけのわからない人なんだよね。

早紀が尊敬しているあたり、なんだか怖い。

「ちょっと、聞いてもいいかな？」

文恵がなにも考えないようにしているうちに、進一が文恵をみていた。進一は少し困ったような、照れているような顔をしている。文恵は震えた声で「どうぞ」と返したが、「猫って、プリンを食べる習性とか、ある？」などと聞かれてしまった。緊張も戸惑いも、一瞬で失せた。

「……習性は、どうでしょう。でも、そうですね。食べないことはないと思います。けっこう甘いものが好きだったりしますから」
早紀がけらけらと笑いながら、「いきなりなんですか？」と進一に詰め寄る。

進一はうつとうしい後輩を手で追い払い、

「最近、変な猫が部屋にやってきて、異様なほどプリンを狙ってくるんだよ。だから、猫ってというのは、もともとそういう生き物だったかなと思ってね」

と理不尽な猫について語った。

毎日というわけではないが、頻繁に訪れるようになった猫。

食後にやってくるのではなく、食事中にあらわれては平気でおかずに奪い、食事前にあらわれては人間より先に食事を要求する。鳴いたりはしない。ただじつと睨んでくる。無視をしようものなら、畳や壁紙がボロボロになる。

「おかげで、好きなものは先に食べるようになった」と進一は笑う。

早紀はケラケラと笑い、文恵もつられて笑っていた。

「で、食後にはプリンを狙ってくるわけですか。佐山さんの天敵みたいなのやっちなあ」

ジャンケンのほかに勝てへんもんがあつたんですねえと、早紀はどこまでも楽しそうだった。

進一はくすりと笑い、「ちゃんと名前もつけたんだ」と告げる。

早紀と文恵が興味を示したところで、進一はその名を口にした。

高まってゆく鼓動に激しさを覚えて、文恵はぎゅっと身体を縮めた。

「ん？ 文恵、どうしたん？ 猫スイッチ入ってしもた？」

早紀が声をかけてきた。

進一も顔つきを変えている。

「大丈夫。大丈夫です」と言つて、文恵は笑つてみせた。
プータロー。

その響きに、文恵の心臓は踊る。
「プータローって、懐かしい名前なんですよ。小学生のころ、毎日のようにやってくる野良猫がいて、その猫のことをプータローと呼んでいたんです。蜂蜜をたっぷりかけたハニートーストが好きだったもので、クマのプーさんから名前をもらいました。はじめての猫で、ほんとにかわいくて大好きだったんですけど、ふっと来なくなつてしまつて……」

思い出すと、泣きたくなる。

「なんや、かなり引きずつてるみたいやね。文恵の尋常やない猫好きは、そいつが原因なんやろか」

早紀はうなずき、ひとりで納得していた。

「佐山さんとこのプータローが、文恵のトラウマ猫やったらええのにねえ」

感動の再会ができるし、と早紀はつづけた。

「あのね。十年以上前の、実家での話よ。それに、プーちゃんはかわいくて性格もよかつたんだから」

文恵はあきれながら早紀に言つて聞かせた。

進一も苦笑して首を横に振つていたが、早紀はケラケラと笑つている。

「もしもそうやったらおもしろいつてだけやん。うちとしては、佐山さんのネーミングセンスが小学生レベルやつてわかつただけで十分やけどな」

文恵はあきれはてて、ちらりと進一を見る。

後輩の失礼な言動をまえに、進一は頭をかきながら苦笑していた。

8 進一と早紀の報酬

学生食堂にあらわれた早紀の表情は、いつもと違っていた。

よく知った後輩の落ち着いた雰囲気を感じて、進一はゆるりと箸をすすめる。ランチセットの豚汁は煮詰まっていた。濃厚なスープに舌の感覚はやられているが、そんなことは表に出さず、余裕のある態度で対応しなければならない。

静かな動きで、早紀が来る。

目礼を交わして、無言のまま正面の席に座った。

相手の出方がわからない以上、先手をうってみるのも一計。

「八代さんなら、まだ研究室にいるぞ」と、進一は箸を休めることなく、早紀を見ることなく声をかけた。

が、早紀は何も答えることなく、進一との間に紙袋を置いた。紙袋の中からカスタードプリンを取り出すと、微笑みをつくりあげ、またひとつ、今度は抹茶プリンをならべた。

「なんの見返りも期待せずに先輩へプレゼントとは、いい心がけだ」
進一の反撃に、焼きプリンをならべようとした早紀の動きがとまる。

「どうした？ プレゼントを贈っておいで、なに受けとってんだコノヤローとか、言うわけないよな？」

進一はコロツケを食しながら、微笑みをととのえる後輩の姿を観察した。そんな無言の圧力に負けたのか、早紀は慣れない作業に失敗して、結局はあきらめた。

いつものようにけらけらと笑い、進一に詰め寄る。

「もちろん三個とも献上いたします。わたくしはただ、佐山代表にプリンを召し上がっていただきながら、我らが大自然研究会期待の新星、西園寺文恵について聞いていただきたいと思っただけのこと
であります」

「猫好きの西園寺さんか」

「そうです。猫依存症の文恵です」

「期待の新星とは初耳だ」

「そう、それです。ぜひとも佐山代表には、彼女の素晴らしい能力を知っていただきたい」

進一がコロツケを食べ終わると、早紀は「お茶をお持ちいたします」と言って席を立った。

進一はお茶をすすりながら、早紀に続きをうながす。

「文恵はときに迷い猫を探しております。見つけ出しては捕獲し、依頼者のもとに届けるわけです。礼金が出るなら受け取りますが、基本はボランティアであり、彼女の生きがいであります」

早紀はプラスチックのスプーンを紙袋から取り出した。

「私も猫探しを手伝ったことがあるのですが、文恵の猫レーダーは素晴らしい。探しているうちに感覚が研ぎ澄まされてゆくようで、その直観力と行動力は驚異的です。あの能力をなんとか別方面で生かせないかと、そんな思いで説得を重ね、ようやく先日、我が研究会に入会させた次第です」

「別方面というのはなんだ。UFOか？ 妖怪か？ そんなんでどうやって説得したんだ？」

視線をそらした早紀は、スプーンを保護するビニール袋を指先で破いた。

「そのへんはおいときましょう。いずれお話はさせていただきますが、その前に、佐山代表には文恵の能力をじかに見届けていただきたい」

「いや、いいよ」

「いやいやいやいや。じつは文恵に猫探しの依頼がありました、明日にでも猫の搜索がはじまります。ぜひとも佐山代表には、今回の機会をつかんでいただきたい」

「パス」

「そんなことをおっしやらずに、ささ、どうぞ」

お召し上がりください、と早紀はスプーンをカスタードプリンの上に置いた。

「ちなみに、文恵はいま部室におります」

進一は嬉しそうな後輩に無言の圧力を加えたあと、カスタードプリンを引き寄せてペリペリと蓋をはがした。早紀の企んでいることはだいたい読めている。そしてなにより、これらのプリンはなかなか捨てがたい。

「あとの二つは、部室でいただくようか」

進一の答えに、早紀は黙って頭を下げる。

頭をあげた早紀の顔は、ずいぶんと得意気にみえた。なんだかなだといつても、この人は頼みを引き受けてくれる。それを知っている顔だった。

「うち、ちょっと野暮用がありますんで」

そんな言葉を残して、早紀は逃げた。

進一はかまわずに旧校舎へ向かう。紙袋を片手にぶらぶらと歩き、大自然研究会の部室前で足を止めた。以前とは何かが違う。原因を探って、違和感の正体はすぐに知れた。入り口の張り紙に、先日までなかった茶トラ猫のイラストがある。

こつもあつさり猫色に染めるとは、なかなか手ごわい。

さすがは柴田の一押しだと、進一は妙に納得しながら部室のなかに入った。

部室には、文恵のほかにUFOメンバーの三人がいた。

文恵は彼らと同様にノートパソコンを開き、しつかりと馴染んでいる。

「なんだ、猫探しはみんなでやるのか？」

進一が聞くと、文恵以外の人間が口々に声をあげる。

「いえいえ、僕らは違いますよ」

「佐山さんだけです」

「ほら、言ったとおりだ」

これまでにどんな会話がなされていたのか、容易に想像がついた。まさか、ほんとうに佐山さんが来られるなんて」

すみません、と文恵は申し訳なさそうに頭を下げた。

「ああ、気にすることはないよ。それより、柴田はなんて言ったんだ？」

「……代役はいるから、猫探しはパスしたいと」

やはり、お前の身代わりか。

「思ったとおりだな。あいつは、以前から猫探しの約束を？」

「はい。わたしがここに入るなら、いつでも手伝ってあげると」

「そうか……で、あいつは何でパスしたいって？」

「それは、その……用事がある、とは言っていましたけど」

UFOメンバーにも心あたりはないという。

本当に用事があるのか。なにか行きたくない理由があるのか。それとも、ただ面倒なだけか。

理由はあとで本人から聞きだすとして、進一は文恵から猫探しの詳しい話を聞いた。

依頼者は猫カフェで知り合った猫仲間の知り合いで、隣町の住人二人で行くと伝えており、交通費は依頼者が出してくれる。明日の午前中には自宅を訪れて、近所の搜索をはじめの予定。見つからなければ暗くなるまで搜索をつづける。動きやすく、汚れてもかまわない服装。進一が用意するものはとくにない。現地集合と決めて、お互いに携帯電話の番号を登録しあった。

「たぶん一日つぶれますけど、大丈夫ですか？」

「かまわないよ。明日はバイトもないし、院生からも、たまには休めって言われているから。じゃあ、向ここの駅に九時集合ってこと

で

進一はイスに座ると、紙袋から報酬を取り出した。

プリン二個で買収されたのかと、外野が騒ぎ出す。

進一は「三個だ」と言いきって、抹茶プリンの蓋をペリペリとはがした。

9 進一と文恵の猫探し

午前九時、十分前には二人とも集合場所にいた。

これまで大人しく地味な印象しかない文恵だったが、今日は違う。ジーンズにスニーカー、薄手のジャージといった活動的な服装をしており、ツヤのある黒髪をうしろで束ねて、整った顔が正面を見据えている。その眼差しは力強く、ポシエットを彩るトラ猫さえ、虎のように睨んでいる気がした。

文恵は挨拶もそこそこに歩きだすと、「さあ、いきましよう」と頼もしい言葉を発した。

なかなか、おもしろい。

進一は笑いをこらえながら、リーダーシップを発揮した文恵のあとに従った。

依頼者の安藤夫人宅で、失踪したシャム猫ジェームスの話を聞く。「今日で三日目になるの」という涙ながらの訴えに文恵はもらい泣き、進一は何ひとつ口をはさむことが出来ないまま、黙って立ち続けることになる。猫仲間による玄関先の会話は長々とつづき、三十分後、失踪猫ジェームスの写真を預かり、ようやく搜索活動を開始した。

まずは自宅付近を搜索すること。

地図を見ながら、文恵が指示を出す。

「ではとりあえず、この道路沿いを探しましょう。佐山さんはあちらの壁に沿って進んでください。陰になったところや溝のほうもしっかりとお願いします」

了解、と言った進一だったが、ふっと思ったち聞いてみる。

「猫探しをするうえで大事なことって、なにかある？」

文恵はすこし腫れた目をこちらに向ける。

微笑みを浮かべてコクリとうなずき、すべてを慈しむような優し

い笑みで進一に言った。

「勘と、執念です」

ゆったりとした口調は愛に満ちていたが、なんとなく、ゾツとした。

搜索活動は、実りなく一時間を過ぎた。

道路の反対側では、文恵が側溝に頭を突っ込んでいる。心地よい陽射しを浴びて、溝からは臭気が漂っていた。進一も顔を突っこみ、何度となくむせている。ときには通り過ぎる人々の視線が突き刺さり、精神的にもなかなかハードな作業だった。

おそらく、彼女は臭気や視線など気にもとめていない。

ものすごい集中力だと感心しながら、進一は地道に搜索をつづけた。

大きな通りにぶつかると、文恵は地図を取り出して搜索場所の変更を決める。

「そんなに遠くじゃあ、ないと思います」

文恵は地図をぼんやりと眺めながら、このあたりかなあと指でなぞる。

なにやら池のようなものがあると思えば、大きな寺の敷地内だった。依頼者の自宅から百メートルほど北に位置している。

進一に反対する意思はなく、ふたりはお寺をめざした。

壁の隙間などは一応チェックしながら、参拝道の入り口まで来て足を止めた。

『ハトや猫にエサやり禁止』と看板が立っている。

由緒あるお寺のようで、敷地は広く木々も多い。猫の隠れそうな場所などいくらかでもありうる。

「野良猫が、いるんだろっな」

と進一はつぶやく。

文恵は、つま先でちょこんと看板を蹴った。

「参拝料がいるみたいですし、敷地内は後回しにしましょう」

口調に変化はないが、文恵が機嫌を損ねているのは進一にもわかった。その気持ちも、理解はできる。

「じゃあ、ぐるっと回ってみようか」

進一は同意して、少しうつむいている文恵とならんだ。

ふたりは塀に沿って歩くことにした。

このあたりにはいないと見切りをつけているのか、文恵は見回す程度で歩いている。

お寺の周囲は二キロほどあった。途中には生垣があり、竹やぶもあり、池に流れ込む小川と橋もある。猫にも三匹出会った。野良猫たちは、ふたりに気づくとすぐに身を隠す。

「あらためて、プータローのふてぶてしさを実感するな」

「プーちゃん、また来たんですか？」

「プーちゃんね。昨日も来たよ、夕食中に」

そうですか、と文恵はつぶやき、進一よりも一歩前にすすんだ。

「うらやましいです。わたしのマンションなんて、ペット禁止なんですよ。猫の訪れる部屋なんて、最高じゃないですか」

前を向いたまま、文恵はそう言った。

大学を選ぶとき、一人暮らしをすることを許されても、ペットと住める部屋は反対されたという。

「父親と母親の両方から、絶対にダメだと大反対されちゃいました」
なんとなく、わかる気もするなあ。

進一が感想を口に出すと、振り返った文恵に恨めしそうな目で見られた。

「まあ、うちのアパートは適当だからね。大家さんの飼いだも、ほとんどアパートの住人が世話をしていた感じだったし。野良猫がやって来るような、オーラかなんかが出てるんだろうなあ」

進一は独り言のように語り、文恵のあとをついて歩いた。

しばらく歩くと、文恵の歩き方が慎重になってきた。ゆっくりとなにかを確かめるように進んでゆく。塀の向こう側には木々が茂っていた。いかにも潜んでいるような雰囲気があり、進一も、気にすれば気になる。

塀が途切れて、格子状の鉄門があらわれた。池が見える。

参拝道の反対側に位置するらしい。

鉄門には鎖が巻かれ、南京錠で施錠されて、『関係者以外立ち入り禁止』と大きな札が貼られている。

「行きましょう」

文恵はさらりと言った。

たしかに登って越えられない高さではない。

が、そこは問題ではない。進一は念のために、万が一のために確認をとる。

「それは、不法侵入だよ。見事なまでに」

文恵は「たぶん、ぎりぎりです」と根拠のないことを言っ
て、足をかける位置を探していた。

やはり、真つ当ではないことを自覚はしている。理解したうえで
乗り越えるつもりだ。

おもしろい、と進一は笑う。

止められないことはわかっていた。猫に対する執念をまえに、法律
順守の精神など無きに等しい。あたりに人はおらず、もしも見つ
かったとしても、自分たちは失踪した猫を探しているにすぎない。

しかし、それでも進一の良心は聞かすにはいられない。

「ジエームスがいるとは限らないだろ？」

文恵は振り向いて進一をみる。

意外そうな顔をしていたが、すぐにニツコリと笑った。

「大丈夫ですよ。わたしの勘は、そのあたりにいる動物霊より当た
りますから」

文恵はかるく言っただけのけたあと、ふたたび鉄門に足場をさがした。

進一が何の反応もとれないうちに、文恵は鉄門のうえに立っていた。向こう側に降り立ち、あたりを警戒してしまった進一を忘れて、さっさと奥へと進んでゆく。

我にかえった進一は、頭をかきながら苦笑した。

してやられた気分だったが、なかなかおもしろい。進一はすぐに文恵を追いかけて、不法侵入をはたした。

ざっと見回す。

文恵は下草を踏み分けて木々の間をすすんでいた。

進一が近くまで寄っていくと、文恵が手をあげて止める。その理由は、すぐに察した。忘れかけていた目的を見つけて、ほんとにいたよと、心のなかで感嘆の声をあげる。

文恵はポシエットからスライスチーズを取り出した。包装をはがして、目の前にいるシャム猫にちらつかせる。お腹を空かせていたのか、よほどの好物なのか、ジエームスは文恵の手からすんなりとチーズを食べた。

逃げそうもないので、進一は文恵のとなりまで近づいた。

「どつやら、共犯者になった価値はあるらしい」

文恵は得意気な笑みをみせると、そつとジエームスを抱きかかえた。

10 進一と文恵の猫談義

ジエームス発見の電話報告を、なんとか終えて、急いで飼い主のもとへ向かった。

依頼者である安藤夫人の自宅に着くまで、ジエームスは大人しく文恵に抱かれている。

鉄門を乗りこえるときだけ、進一も抱えた。攻撃されはしないかという不安は杞憂に終わる。安心もした。猫そのものと相性が悪いわけではないらしい。プーターローが別格なのだろう。もう少し猫の感触を楽しみたいとも思ったが、文恵が疲れたそぶりを見せることなく独占していた。

狂喜、そして号泣する安藤夫人は、帰還したジエームスをひとしきり抱きしめて、チーズをちらしたジューシーなキャットフードを与えた。がつついて食べる愛猫を見守りながら、ともに涙を流している文恵の手をつかみ、感謝と賛辞の言葉を洪水のごとく流し浴びせ、ときにその飛沫を進一にふりまいた。いつしか話題はかのお寺に向かい、罵詈雑言が飛び交う。進一は「まあ、お寺にはお寺の事情があるのでしょう」などということは一切口に出さずに、香り高い紅茶をちびちび飲んで過ごした。

夫人は最後まで進一を黙らせている。

交通費といって渡された封筒のなかには、それぞれ一万円札が一枚ずつ入っていた。

「ほんとは御寿司を頼もうかと思ったのよ。でもねえ、若い子たちはピザのほうがいいかもしれないとか、悩みだしたらどうにもならなかったの。だから、これでおいしいものでも食べてね」

夫人はふたりに何も言わず、交通費を受けとらせた。

依頼者の自宅をでたときには、午後一時をまわっていた。

「なんだろう、どつと疲れた」

エネルギーを奪われたような気がする。腹も減っていた。

「なにか食べていきましようか？」

文恵も空腹感はあるらしく、提案を断る理由もない。

ふたりは目についたファミリーレストランで猫探しの成功を祝うことにした。

臨時収入があり、財布の相談も容易い。プチ贅沢も可能だ。昼間だが、アルコールも許されよう。

「では、ジエームスの帰還を祝して、乾杯」

ふたりはビールジョッキを傾ける。

「大成功でしたね。こんなに早く見つけられたのは初めてです。暗くなるまで探すなんてよくあることですし、一日で見つかるとも限りません。もちろん、見つからないことだってあります」

文恵は見事に杯を乾かして、勢いよく語った。

「あの直観力をもつてしてもそうなのか。でもまあ、柴田が欲しがるのはよくわかる。未知との遭遇に利用したいんだろう。超能力そのものにも興味があるからな」

「本人もそんなことを言っていました。ですから、何回か猫探しを手伝ってはくれたんですけど……」

文恵はジョッキを両手でつかみながら小さくなり、上目遣いで進一をみた。

早紀も手伝った前回の猫探しでは、トラブルが起きた。

感覚を研ぎ澄ませていった文恵の決断により、依頼者の隣人宅へと踏み込んだのだ。

家捜しをさせてほしいと頼んだが断られ、窓を割って侵入すると言い出した文恵を、早紀が必死で止める。早紀が知るわけもなかったが、依頼者にも感じるものがあつたらしい。依頼者を連れてきて事態は悪化し、近所の住民が警察を呼び、早紀を囿にして隙をついた文恵が家宅侵入をはたして、依頼者の猫を発見した。

どうやら猫を意図的に隠していた。

犯行の理由を警察にも問われて、隣人はすべてを語ることになった。

文恵たちにもいろいろ問題はあっただろう。だが、事態が不倫スキヤンダルにまで発展しては猫どころではない。「君たちは、もう帰りなさい」と困惑顔の警察官に許しをもらい、文恵たちは修羅場から逃げ帰った。

「あの時は、さすがにしんどいわ、って言われましたね。だから、すみません。早紀が今回の猫探しをパスした理由も、ほんとはわかっていたんです」

そうか。今回のやつは、まだ、まともだったのか。

「そうか……。まあ、気にすることはないよ。理由はともかく、柴田が身代わりを求めていたのは読めていたし、タダってわけでもなかったからね。しかし、柴田のやつが抑える側にまわるとはなあ。知らないところでは、あいつも苦勞をしていたのか」

「わたしも、さすがに迷惑をかけすぎたと思いついて、大自然研究会への誘いを受けたんです。そういうえば、夏合宿だけでも参加してほしいと言っていましたけど、なにかあるんですか？」

「夏合宿ねえ。たぶん、ツチノコ探しのことだろうな」

進一は文恵をみる。あの直観力を知りたいま、たしかに、どうなるか興味はある。

「ツチノコって、いるんですか？」

「いてくれたらいい、とは思う」

進一もビールを半分ほど飲んだ。

「ああ、飲むなら、こっちにかまわずどんどん頼んでいいよ」

文恵はコクリとうなずき、照れながらメニューを手にとった。

捜索活動の成功とアルコールの相乗効果により、文恵の口はなめらかに語る。話題はもちろん猫であり、進一は食事をすすめながら

文恵先生の講義を拝聴した。

猫は偏食に注意。キャットフードがよい。雄猫の去勢。招き猫誕生。

話題は次々と変化をとげた。

「わたしが文学部に入ったのは猫文学の研究をするためです。文人たちが語る猫を通じて、いかに猫が素晴らしい存在なのかを世の中に伝えたい。なにより、間違いは正さないといいけません。エドガー・アラン・ポーの『黒猫』という小説を知っていますか？ 日本で黒猫が不吉な存在なものとされたのはこの作品が原因っていうじゃありませんか。まったくんでもない誤解ですよ。あれは酒に溺れた人間が墮落してついには殺人を犯してしまう話で悪いのアルコールなんです。溺れてしまった人間なんです。黒猫はヒーローですよ。その身を挺し、隠蔽された罪を鮮やかに暴きだしたヒーローなんです」

文恵は米焼酎をグイッとあおった。

そうなのか。よくわからないけれど、きっとそうなんだろう。

進一はうなずきながらチーズハンバーグを噛みしめて、子どものようにはしゃぐ文恵を観察した。

いつもと違い、無邪気に明るい。

これがいわゆる、猫スイッチの入った状態か。

進一は早紀が口にした言葉を思い出し、紙ナプキンで口もとを隠した。

食事はすすみ、進一はバニラアイスも食べ終える。文恵も空腹は満たされただろう。飲み足りない雰囲気はあったが、ここは居酒屋ではない。

「そろそろラストオーダーにしようか。話の続きは、また次回ということで」

文恵は「そうですね」と素直に応じて、梅酒を飲みながらメニューをながめた。しばらくは楽しそうに笑っていたが、その無邪気な

笑みはとつぜん固まる。頬はいつそう朱に染まり、文恵は隠れるように下を向いた。

「いやいや、じつにおもしろい」

こらえきれずに、進一は笑った。

進一はホットコーヒーを注文し、文恵も同じものオーダーした。

文恵は砂糖を入れなかったが、スプーンをまわしてコーヒーに渦をつくる。

「猫の話ばかり、ほんとにすみません。わたし、昔からこうなんです。猫のことになると我を忘れてしまって……。どうしても周りにから浮いてしまうので、小学生のころはいじめにも会いましたね。

先生からも、猫娘なんて呼ばれたりして、野良猫をイジメていた男の子を角材でおもいきり撲ったりもして、まあそれでいじめは終わりましたけど……」

文恵は、くるりくるりとスプーンをまわした。

進一はコーヒーに口をつけて、自分も砂糖を入れていないことに気づく。

「まあ、いいんじゃないかな。いろいろと、大変みただけで、猫が好きなのは悪いことじゃない。安藤さんとか、似たような人もいるわけだし、変貌するところはおもしろくもある」

進一はコーヒーに砂糖をおとした。

文恵もようやくコーヒーに口をつける。砂糖の有無は関係ないらしい。ブラックのまま、さらにコーヒーを口に運んだ。

「でも、それだけ猫を溺愛するようになったのは、初めての猫だったプーちゃんの影響になるわけだ。そっちのプーターローは、そんなに可愛かった？」

「それはもう。あんなにかわいい猫もめずらしいと思います」

「こっちのプーターローとはずいぶん違うな」

「姿形は似ていても、性格は違うんでしょね」

コーヒーに渦をつくりながら、進一は頬をゆるめた。

ふっと部室でのやりとりを思い出して、おもわず苦笑する。

プータローの特徴については、はじめて会ったときに話している。似ていることがわかると、早紀が一番興奮していた。「同じ猫であるわけがない」、そう主張する進一と文恵に、「猫又かもしれへん」と、早紀はプータロー化け猫説を主張した。

化け猫ってのは、プリンを狙うものなのか？

進一の問いかけに、「変種ですよ、変種」と早紀は答える。こたえてはいたが、さすがに無理があるらしいと、表情は語っていた。

猫又って、人間を襲うんでしょ？ 変種だとハニートーストを食べるの？

文恵の問いかけには、「夢がないなあ」と返している。

同じことを思い出したのか、文恵も苦笑していた。

しかし、その表情は揺らぐ。

「そういえば、父はプーちゃんのこと、こんな図々しい生き物がいるのかって、唸っていたような気が……」

進一はコーヒを口にしたが、さほど味わうことなく飲み込んだ。猫を溺愛している人間は、猫のいかなる行動も美化しているのではないか。ましてや過去の初猫など、不都合な真実は記憶から消し去っているのかもしれない。

「性格も、そっくりってことはないよね？」

「母もかわいがっていましたし、性格は良かったはずですよ。でも、父は、そうですね。台風みたいなやつだ、とか、言っていたような……」

進一はコーヒークップを口もとから遠ざけて、テーブルに置いた。

「身体の特徴は似ているんだよね？ 瞳の色とか」

「ええ。尻尾の長いところとか、ちよつとたるんでいるところとか。うっすら縞模様もあるんですね？」

「ああ、あったね。茶トラの混じった雑種かと思った」

進一はコーヒーにクリップを注ぎ、「毛の色はこんな感じ」とキヤラメル色に染めた。

「やっぱり似てますね。背中はこの色で、お腹のほうは少し白かったはずですよ」

はつきり答える文恵に、「よく覚えているね」と進一は返した。好きでしたから。

すこし視線を落としながら、文恵は微笑んだ。

ふたりは静かにコーヒーを運ぶ。

沈黙のあと、

「本当に、同じ猫だったりしてね」

と進一が言った。

文恵は上目遣いで進一をみる。

「十年以上前の、実家での話ですから、それはないと思いますけど」

「けど？」

「会ってみたい、とは思いますが」

文恵は告げると、コーヒーに視線を落とした。

進一も、キヤラメル色のコーヒーに視線を落とす。

「あの猫を連れて歩くのは無理だな。部屋に来てもらってもいいけど、プーターローがいつ来るのかわからないしね。家にいるときを計ったように現れて、たいがいは、喰ったらすぐに出ていくから」

進一はカップを運ぶ。

キヤラメル色のコーヒーは甘ったるく、すでに熱くはなかった。

「写真だけでも持ってこようか。携帯電話の写真だけど」

「そうですね。ぜひ、お願いします。じゃあ、あの、写真がとれたら、送信してもらえれば」

それもそうだと、お互いのメールアドレスを交換した。

「写真だけなら簡単だ。連日やってくることもあるから、早ければ、今日の夕食時にでも送れる」

進一はそういって、一気にコーヒーを飲み干した。

ふたりはファミレスを出て、電車のなかで別れを告げる。
進一の予想は外れた。
それから一週間、プーターローは姿をみせなかった。

11 文恵と悪い女

文恵はベッドに横になり、猫のように身体を丸めた。

ジエームスを探したその日から、無性に寂しくて胸がざわつく。

父親から送られてくる実家の猫たちの画像をながめても、以前のようには満たされない。

目を閉じれば、幼いころの記憶がよみがえる。

記憶のなかには、キャラメル色の猫がいる。

「プーちゃんじゃない」

文恵は目を開けて、ひとりきりの部屋で静かにつぶやく。

「プーちゃんなわけ、ない」

いくら言って聞かせても、納得できない自分がいる。

ため息をついて、思い出されたのは、進一と猫を探した日のこと。楽しかった会話と、約束のこと。

ジエームスちゃんが無事に見つかって、うれしかったただけじゃない。お酒を飲んで、好きなことを好きなだけ話せて、それなのに、佐山さんはまったく変わらなかつた。早紀と同じだ。ツチノコの話がでたときに、早紀と同じような目で見られた気もする。あのふたり、似ているところがあるのかな？

うつん、そんなわけないか。UFO好きの人たちもツチノコはいるって当たり前信じていたから、きつと、男のひとには普通のことなんだよね。やっぱり大自然研究会の代表なんてやっていると、わたしぐらいじゃ平気なんだろうな。早紀が頼りにするのもわかる気がする。自分のことをあんなに素直に話せるなんて、思わなかつた。

（プータロー、今日も来ませんか？）

佐山さんがいいかげんな約束をするとは思えない。それなのに、同じ言葉を今日も送ってしまった。返事は変わらないって、ちゃんとわかっている。それでも、佐山さんに悪いって思っても、メールを送らずにはいられない。

文恵はふたたび目を閉じた。

ずっと心に沈んでいた、幼いころの記憶がよみがえる。

知らない女の人。

若くて、水商売をしていそうな、派手な女の人がりビングに入ってくる。

よくわからない会話のあと、涙ぐむ母親がいて、勝ち誇るように笑う女の人がいる。

プーちゃんがくる。

家に寄り付くようになった野良猫のプータロー。

悠然と歩きながら、まっすぐに、怯えているわたしのところへ。

抱きしめたプーちゃんがあたたかくて、心強くて、わたしは女の人をみる。

もう、いじめないで。

女の人がこっちを見る。

その顔は、なぜか悲しそうで、寂しそうにおもえた。

いまならわかる。あの女の方は、お父さんの不倫相手だ。だからお母さんは泣いていて、ふかく傷ついた。そうでないなら、ふらつと車道に出るはずがない。入院することになったけれど、運がよかったから怪我だけで済んだ。命を落としていても、おかしくはなかった。

子どもながらに、あの女の方が悪いんだと感じていた。

二度と来ることはなかったけれど、負の感情はすべて、あの女の

人に向かった。

許せないと思ったし、いまでも許せないと思う。父親をたぶらかすなって、いまなら言えるかもしれない。きつと、お父さんにも文句を言うだろう。あのときは、ひとつも文句を言えていない。

でも、わたしは本当に事態をわかっていなかった？ お父さんに責任があることを、なんとなく理解していたような気もする。わかっただけで、それでも許していたのかな。好きだったから。ずっと仕事ばかりだったお父さんが、会社を休んでも家事を頑張っていて、家にいてくれて、うれしかったから。

そうだ。病院のベッドにいたお母さんも、それまでと同じように接していた。娘にはわからないようにしていたけれど、ふたりにだって、いろいろとあったと思う。お父さんの雰囲気が変わって、両親と一緒にいる時間があつて、なんだか仲が良さそうに見えたから、わたしは許したのかもしれない。

母親のいない生活。

学校から帰っても、誰もいない生活。

あの女の人がまた来るかもしれない、そんなことを考える生活。プーちゃんがいなかったら、ひとり怯えて過ごしていたはずだ。お父さんがどれだけ会社から早く帰ってきてても、すぐにお母さんのところに連れて行ってかれて、家族で仲良くしていたとしても、プーちゃんが寂しさを吹っ飛ばしてくれなかったら、わたしは家に帰ることができなかった。

心強くて、あつたかくて、かわいい猫のプータロー。
ふっと来なくなってしまうた、大好きなプーちゃん。

文恵はゆっくり目を開けると、小さく吐息をもらした。

佐山さんが教えてくれた特徴はプーちゃんに似ている。同じプータローでも、プーちゃんじゃない。わかっているのに、わたしは期待している。

文恵はそつと手をのばした。
目を閉じればそこについても、ふねることはできなかつた。

12 進一と二つの約束

二度寝から目覚めると、ゴトンという音が聞こえた。

きつと空耳だ。そんな考えが頭をよぎったが、なにやらガーガーと音がする。脳裏に浮かんだプータローは、爪で網戸を引っかいていた。

進一は起き上がり、窓を開けてやる。

「なかなか来ないと思ったら、朝から不意打ちときたか」

気だるそうな半眼で、蜂蜜色の瞳が進一をみる。それで挨拶は終わったらしく、プータローは何の遠慮もなく部屋に入り、当然のごとく布団に居座った。

洗顔をすませ、湯を沸かしていると、布団からプータローが直視してくる。進一はイワシの煮付け缶を選ぶと、炊飯器のなかを確認した。

イワシ煮混ぜご飯をつくってプータローに差し出し、カップに熱湯をそそいでインスタントコーヒーをつくる。砂糖は切らしている忘れていた。しかたなくブラックコーヒーをすすりながら、猫飯を喰らうプータローをながめた。「よく食うな」と感想がもれて、直後にプータローから睨まれた。

視線をそらすと、携帯電話が視界にはいった。

手にとって、理香からのメールをもう一度見ておく。

今日も理香には会えない。いつになったら会えるのか、それもわからない。

ため息を漏らして、苦いコーヒーをすすった。

(追加公演決定!!!!)

件名だけで、理香の喜ぶ姿が想像できた。

よその劇団によるものらしいが、活躍の機会が増えたことは喜ば

しい。理香の評判が高まれば、所属している劇団も得をするはずだ。あの人は、なんでもやる。自力公演も頑張っているけれど、あの人は積極的に他の劇団と交流をもっている。役者を育てるためなら、なんだってやるとあの人は言った。

「理香のやつと、距離をおいちゃくれないかい？」

普段はいい加減に見えるのに、あの時だけは真面目な顔をしていた。

「君のおかげで、理香は一気に開花したと思う。けど、今度は君が邪魔になると思ってる」

あの人の言葉を鵜呑みにしたわけじゃない。役者の真顔なんて、信じるものじゃない。けれど、役者であることに集中させたい、そこだけは意見が一致した。できるだけ、こちらからは連絡しないようにと、約束した。

理香は役者として成長している。

あの人の言ったことは、正しいのかもしれない。

長年にわたって役者をつづけて、劇団を立ち上げた人だ。いい加減に見えても、ただの小さいオッサンじゃない。

進一は受信ボックスを閉じようとして、文恵のメールを見つけた。コーヒーをすすって、ようやく文恵との約束を思い出す。

「写真、送らないとな」

携帯電話のレンズを向けると、プータローはカメラ目線だ。カシヤリと写せば、蜂蜜色の瞳が美しい。何枚か撮って、長い尻尾やキヤラメル色のふくよかな身体など、特徴をバッチリおさえたベストショットを選び出す。

どの写真もカメラ目線だと気づき、被写体を見る。プータローは視線をそらして、皿をなめ回した。

写真を添えて、文恵にメールを送る。

食事を終えたプーターローは、布団で丸くなっていた。

「プリンはないぞ」と声をかけたが、動く気配はない。

こいつ、帰る気ないな。居座るのか？ プリンを買ってくるまで居座るつもりなのか？

心配してもしかたなく、進一はコーヒーを飲み干してカップを洗った。

携帯電話が震えて鳴り響く。

文恵からのメールだと予想はついた。携帯電話を手にとって、メールを確認をする。

(いまから行きます)

文章はシンプルであり、読み違いはないが、意味を読み取るには時間がかかった。

いまから部屋に来る。プーターローに会いに、ここに来る。どうやって？ 彼女はこの場所を知らないはずだ。勘か？ 直感だけで来るのか？

考えがまとまらないうちに、携帯電話が着信を知らせる。

液晶画面には西園寺文恵と表示されていた。電話に出ると、やけに大きな文恵の声が聞こえる。何を言っているのか聞き取りづらい。何度となく聞きなおして、ようやく住所を尋ねることがわかった。

13 感動の再会と静かなる闘い

進一が駅まで迎えに行くと言っても、文恵は聞く耳を持たなかった。

「なんとなくでも行きますから、プーちゃんを見張っていてください」

そう言い残して、一方的に電話を切られた。

たしかに逃げられては意味がない。

とりあえず窓を閉めた。あとはプーターローがいかに暴れようとも部屋から出さなければよい。もしも暴れ出したら、閉じこめて部屋を離れようと決めた。

プーターローに問題はなく、恐れていたような事態は起こらなかったが、面倒なことにはなっていた。

「寝ているから、大丈夫」

「問題ないよ。そう、東口から出ればいい」

「布団で猫らしく眠っているから。そうそう、児童公園が見えたら、あとはそのまま坂道を上がればいい」

五分に一回は文恵から連絡があり、そのたびにプーターローが大人しく部屋にいることを伝えて、ついでに道順を説明した。

そして、部屋のチャイムが鳴った。

ドアを開けると、紙袋をかかえた文恵が、一歩まえに踏み出した。「お邪魔します」

と誰かに言っ、文恵は使い込んだスニーカーを脱ぎだす。

ストリートジーンズに、トラ猫のポシエツト。

小さな三毛猫がちよこんと座る、淡いクリーム色のロングシャツ。ツヤのある黒髪をうしろで束ねて、桜色に染まった顔がはつきりと見える。

呼吸は荒いが、生き生きとした表情に苦しみの影はない。

「どうぞ、遠慮なく」

進一は苦笑しながら身体の向きを変えて、文恵に奥の部屋を見せる。

と、文恵の行動は速い。

飛ぶように駆け抜けたかと思えば、寝ていたプータローを抱えあげている。

「プーちゃんだ。やっぱりプーちゃんだ」

文恵は子どものように騒ぎ、無邪気に笑いながら涙を浮かべて、嬉々としてプータローに頬を寄せた。

寝起きのプータローは薄っすらと目を開けて、「なんとかしろよ」と言いたげに進一を見ている。

されるがまま、無抵抗のプータロー。

はじめて見る姿に、進一は笑った。

何を言っても無駄のような気がして、しばらくはそのまま見ている。

どうやら彼女は感動の再会をしているらしい。

そんなに似ているのか？ それとも、本当に同じ猫なのか？ 同

じ猫に、同じ名前をつけた？

早紀の化け猫説を思い出して、進一は苦笑する。

猫はくわしく知らないが、なんだか妙な猫だとは思う。もしかしたら本当に同じ猫かもしれない。何十年も生きる猫がいたって、べつにかまわない。プリンを狙うぐらいなら、化け猫だって文句はない。プータローなどと名付けたのは、妖力によるものだと言いつてもできる。

しかしだ。

「そんなやつでも、猫好きには勝てないのか？」

進一は笑い、プータローに聞いた。

文恵がプータローを抱いたまま顔を向ける。どうやら、声は届い

ているらしい。

「コーヒーでも飲む？ インスタントで、砂糖ないけど」

文恵の表情が、あつという間に硬くなる。

猫スイッチが切れたらしいと、進一は声をもらして笑った。

「あの、それ、よかつたらどうぞ」

文恵は紙袋を視線で差し出した。

打ち捨てられた紙袋のなかには、黒蜜プリンが三個と猫の缶詰が九個入っていた。

布団を片付けて、折りたたみテーブルを用意した。

プリンの存在に気づいたのか、プーターローは紙袋を凝視している。

進一は猫の視線など見なかったことにして、テーブルにコーヒーカップとグラスを置いた。

文恵にアイスコーヒーを差し出す。

「ありがとうございます」

文恵はプーターローを抱えたまま、グラスを手にとった。たっぷりと氷を入れてあり、よく冷えている。走ってきたと思われる文恵にはちょうどよいだろう。見るかぎり、文恵はアイスコーヒーに注意が向けられて、プーターローの視線に気づいていない。

進一はうずうずしているプーターローを見やり、してやったりの気分です。分です。

しかし、すぐに自分の過ちを悟った。

「どうかされました？」

「ん？ いや、なんでもない。プーターローがあまりにも大人しいから」

「ほんと、いい子ですよねえ」

文恵はプーターローをぎゅっと抱きしめる。ふたたび猫スイッチが入ったらしい。

しかし、文恵の変貌をまえにしても、進一に笑う余裕はなかった。

コーヒーが苦い。

ブラックなので当たり前だが、いつもと違うプーターローを楽しむあまり、油断していた。

もうすでに、先ほど目にした黒蜜プリンが食べたい。

進一は妖しい光に気づいてプーターローを見た。蜂蜜色の瞳が進一を見ている。いつも以上の上から目線だ。先ほどとは立場が逆転している。文恵に動きを封じられてはいるが、プーターローからは余裕を感じる。

「ほんとに化け猫じゃないだろうな」

「はい？」

「いやいや、なんでもないなんでもない」

進一の不審な態度に何を思ったのか、文恵はまたしても表情が硬くなり、

「どうでしょう。プリンでも、食べませんか？」

と顔を真っ赤にしながら提案した。

一呼吸おいて、進一はコーヒーをすすり、プーターローはもぞもぞと脱出を試みる。

文恵にしてみれば、話題を変えたつもりなのだろう。だが、進一から返答はなく、プーターローは逃げ出そうともがきはじめる。

「プリン、いただくかな」

文恵の戸惑いは受け流し、進一は言った。

文恵はもがいているプーターローに忙しく、「はい、どうぞ」とあわてながら答える。

進一は紙袋の中身をテーブルにならべていった。猫の缶詰をすべて置いて、黒蜜プリンをひとつずつ置いていく。三個目のプリンがならんだとき、プーターローの動きがピタッと止まる。よくよく考えてみれば、今回は人間と猫で我慢比べをする理由がないのではないかと、進一も気づいた。

「三個あるってことは、プーターローの分もある？」

進一の問いに、こちらを見た文恵の視線が宙を泳いだ。

「……ええ、もちろんありますよ。ちゃんと忘れずに買いましたから」

上から目線のプータローを抱きながら、文恵は硬い笑顔をつくりあげた。

それはよかったとつぶやいて、進一は苦いコーヒーを味わう。頭をかきながら立ちあがると、スプーンと皿を持ってくるためにキッチンへ入った。

テーブルの上には、コーヒーカップとグラスがひとつずつ、猫の缶詰が九個、スプーンをのせた黒蜜プリンの容器が二つ、プリンが盛られた皿がひとつ、猫の前脚が二本。

「こんなに礼儀正しい猫なんて、そうはいませんよねえ」

文恵に同意を求められたが、進一は何も言い返せなかった。それでも文恵はまったく気にしていない。話しかけているようで、実際はひとり言のようなものらしい。

ゆったりとプリンを楽しんでいる猫と、そんな猫をデレデレしながら見守るサークルの後輩。

自分の部屋で起きている出来事を、なんとかしようという気は失せた。

進一は容器の蓋をペリペリはがして、黒蜜プリンをスプーンですくいあげる。たとえ猫の分け前であっても、口にしたプリンは幸せをもたらした。

14 猫に癒され、時間を忘れて

文恵は飽きることなくプータローを撫でまわし、ときにはギュッと抱きしめてほろほろと涙を流す。

黒蜜プリンを一個半ほど食べたプータローは、うつらうつらと眠たそうにしていた。ことごとく眠りを邪魔されているが、それでもプータローは何もしない。されるがままにすべてを受け入れて、文恵を慰めていた。

点滅を繰り返した猫スイッチも、ついには限界をこえる。

文恵は落ち着いてプータローと触れ合えるようになり、触れ合いながら会話もできるようになった。

「いろいろと、すみません」

進一に笑いかけながら、文恵は涙をぬぐった。

涙をふいて鼻をかみ、「トイレ、お借りします」と文恵は告げる。心にゆとりがあらわれた文恵がトイレに立って、プータローはテールのうえに解放される。さすがにトイレまで連れてはいかななかった。当然ではあるが、文恵のスキンシップを見つけた進一にとって、たとえ一時でもプータローから離れるなど、憑き物がとれたような印象をうける。なぜテーブルに猫を置くのか、もはや疑問にさえ浮かばなかった。

プータローは身体を横に投げ出すと、ごろんと寝返りをうち、眠たそうな目で進一を見る。

「どうして彼女には無抵抗なんだ？」

目の前で横たわる猫に、進一は問いかける。

撫でようと近づけた進一の手は、猫パンチにはじかれた。

朝からコーヒートプリンしか食べていない進一は、文恵に留守番を頼んで買い物に出かけた。

プーターローがいるかぎり、文恵が部屋を離れるとは思えない。遠慮する文恵に好きなパスタソースを聞いてから、進一は自転車ですーパーに向かった。食材と砂糖、特売のハニープリンを買い込み、ゆったりとペダルをこいで坂道をのぼる。

部屋に戻った進一は、変わらぬ光景を確認して「ただいま」と言った。

パスタを茹でて、パツクのチーズソースをからめる。文恵にはタラコのソース。

プーターローは文恵の膝で眠り込んでおり、まともな会話をしながら、ゆったりとした食事をする事ができた。過去と現在におけるプーターローの魅力を、文恵は落ち着きながらも語りつづける。進一は苦笑しながら話を聞いた。納得できる部分は多くなかったが、そこは受け流して話を聞いていた。猫好きの視点ではどう見えるのか、その違いがおもしろくもあった。

進一は自分好みのコーヒーを味わいながら、文恵との会話に時間を忘れた。

大きな窓から西日が射し込んで、プーターローが目覚める。

文恵の邪魔もなく、プーターローは畳で大きく伸びをした。冷蔵庫のほうを向いて鼻をヒクつかせたが、結局は小さい窓のほうへ歩き、窓の下で進一をまつすぐに見る。

「帰るみたい」

進一はそう言って、文恵を見る。

「プーちゃんは、やっぱり自由がいいんでしょうね」

あの頃と、変わらないな。

文恵の寂しそうなつぶやきに、進一は小さく笑った。

進一は窓を開けて、「また来いよ」と別れを告げる。

プーターローは窓枠に跳び上がり、ゴトンと音を鳴らして、外の世

界へ帰っていった。

「それじゃあ、わたしもそろそろ帰ります」

立ち上がっていた文恵が、「今日は本当にありがとうございます」と言いながら玄関に向かう。使い込んだスニーカーを履くと、進一にペコリと一礼をしてドアを開ける。「気をつけて」という言葉の背に受けて、文恵は部屋から去っていった。

進一は腕を組んで、しばらくドアを見ていた。

六畳間から携帯電話と財布を手にとると、玄関から部屋を出る。ゆっくり歩いてアパートから出ると、周囲に気を配りながら坂道を下っていく。駅が見える場所までは直線に近い一本道。誰であろうと迷うはずはなく、沈んでいく太陽を望みながら駅に向かう。チワワを連れた中年女性とすれ違い、顔見知りだったので会釈をかわした。女性の表情に違和感を覚えて、すこし歩みを速めて、塀に張りつく文恵をみつけた。

「やっぱりか」

その声で進一に気づき、文恵は塀から離れた。

「ずいぶん物分かりのいいことを言うから、こっちまで感傷的な気分になったのに。しっかり後を追いかけてるじゃないか」

文恵は視線をそらしていたが、反省しているようには見えなかった。

進一があきれて溜め息をつくとき、文恵は上目遣いで進一をみる。

「……逃げられちゃいました」

と、イタズラの見つかつた子どものように、照れながら笑っていた。

進一は文恵とならんで歩き、駅に向かう。

「連れて帰ろうとか考えたわけじゃありませんよ。ちょっと、プーちゃんはどこに行くのかなあって、気になっただけですから」

「で、どこまで追いかけるつもりだった？ さっき塀の上に登ろうとしてなかったか？」

文恵は目を合わそうとせず、「大丈夫ですよ」と言い張った。恐れていたとおり、人間の通る場所じゃない猫道でさえチャレンジする文恵。もしもプーターローが他人の家に上がり込んだら。もしも雑木林のなかへ入っていったら。もしも信号などないところで車道を横断しようとしたら。

考えるだけで不安になる。

落ち着かない気持ちになって部屋を出たが、はつきりと危険性を知ってしまった。プーターローに逃げられたとはいえ、偶然見つける可能性も、見つけだす可能性すらある。止めたほうがいいと言っても、止めるわけがない。精神の安定を保つためには、文恵を駅まで送るしかないだろう。

進一はあきらめて、溜め息をついた。

15 破られた約束

ニュース番組がCMに入り、進一は目線を上げた。

黒いブラウン管テレビの上で、少し斜めに立っているアナログ時計。
計。

変わりなく、淡々と時を刻む時計をながめて、進一は満足気に息をつく。

コーヒーの香りが漂い、テーブルのうえには、ハニープリンの空容器も置かれている。砂糖をひかえたコーヒーを味わいながら、進一は思う。最高のスイーツタイムがあるとすれば、それは、理香のことを想いながら、スイーツを楽しむことかもしれない。

時計をながめて、頬が緩む。

こんな時間を過ごせるなど、朝には想像すらできなかった。

「プーターローのせいだな」

ひとりつぶやいて、流されて過ごした半日を振り返る。

「まあ、プーターローと、彼女のおかげか」

頭をかきながら笑いをこらえて、部屋に乗り込んできた後輩の姿を思い出した。

紙袋を抱えて、呼吸を乱して、頬を染めて、期待のこもった真剣な眼差しで、まっすぐに見てきた。すぐに一步迫ってくると、遠慮なく靴を脱ぎだす。三毛猫がいたロングシャツには女性らしさがあったが、全体的には、汚れたスニーカーで残念なことになっていた。猫探しのときに見たスニーカー。靴を選ぶ余裕がなかったのか、選んだ結果があれなのか。

CMは終わり、スポーツニュースが流れていた。

進一は画面を見てはいたが、情報はまったく入ってこなかった。

文惠のことが頭から離れず、思い返すたびににおもしろさが増していく。苦笑したり、溜め息をついたりもしたが、どれも嫌なものでは

ない。いまとなつてはなにもかも、心地よい気分にならなかつた。

心に浮かぶ絵のなかには、もちろんプータローもいる。進一のなかでは、文恵とプータローは一枚の絵になっていた。

プータローなくして、あの文恵はいない。また文恵がいることで、プータローも変わる。

ほんとに化け猫のような気がしてきたプータローも、文恵のまえでは大人しい。行儀よく座り、文恵にスプーンでプリンを食べさせてもらう姿など、進一にとっては信じがたい光景だった。なんだあれはと、いまはもう、笑うことしかできない。

進一はコーヒーを飲み干すと、テレビの電源を切った。

洗い物をすませて、歯を磨いて、シャワーを浴びて、明日に備えてとつとと寝よう。

「カフェインには負ける気がしねえ、か」

八代さんに似てきたかな、と楽しみに笑う。

文恵とプータローが騒がしいのに、進一の心は平静で落ち着いていた。

空しさはなく、理香の姿もなかった。

布団に寝ころぶと、携帯電話がメールを受信した。

起き上がり、時計にちらりと視線が動いて、携帯電話をすぐに調べた。

彼女からのメール。

件名には（プーちゃん来てますか？）と表示されている。

「やってくれるなあ」

と独り言をもらして、メールの内容を確認した。

本文には今日のお礼と連絡のお願いが書かれていた。

本気でプータローが来ているとは考えていないらしい。件名に（

プーちゃん来てますか？」などと書いたのは、少しは期待をしていたのか、ちよつとした冗談なのだろう。

読み終えて、やれやれと息をつく。

返信メールを出そうとして、ふつと、操作を中断した。

「とうか、来ていたらどうするつもりだ？ 夜中でも来るのか？ いやいや、それはさすがにダメだろう。ならなんだ？ 朝までプータローを帰さないようにするのか？」

ぶつぶつと独り言をいいながら、暗くなったら来ないことを伝えるべく、ポチポチと操作をはじめた。

「ほんとに、最後までやってくれる」

布団に寝ころがり、携帯電話を離して置いた。

もう彼女から連絡はないだろう。たぶん、理香のメールもない。

しばらくは舞台に集中しなきゃならない。わかっているのに、つい期待をしてしまう。

さっきは、彼女からのメールでよかった。

失望感はない。

むしろ、想定外のセリフに興味をそそられた。

なんでもない広告メールだったら、きつと気分は沈んでいただろう。

別れる間際、駅の改札口で文恵は言った。

「プーちゃんが来たら、また連絡してもらえますか？」

進一の答えに、文恵は無垢な笑顔をみせる。

必ず連絡をくれると、進一を信頼している顔。プータローに会えることを確信している顔だった。現われないのであれば、なんと少しでも探し出したのかもしれない。だが進一には、文恵が安心していうように思えた。

「プーちゃんは、わたしの守護天使なんです」

と文恵は進一に語っている。

進一がパスタを嘔き出しそうになるのを見て、文恵は「ほんとうですよ。悪いひとから守ってくれたりするんです」とムキになって抗議する。

「たしかに天使なんて子どももの発想ですよ。でも当時は、いい子にしていると天使が守ってくれるのよって、母親から聞かされたりしていたんで、わたしのなかでプーちゃんは天使そのものに……いや、だからなんで笑うんですか？」

進一は謝っていたが、笑いを止めることはできなかった。なにを語られようと、文恵の膝で眠るふくよかな猫は、天使というにはあまりにもだらしなく、ふてぶてしい。化け猫なら考えられても、天使というのは無理があった。

守護天使として見ることでできなかったが、それでも文恵の心情を垣間見た気はした。

駅の改札口で文恵の笑顔を見たとき、進一はふっと感じる。

プーターローはずっと味方だった。

そしていまでも、自分を守ってくれている。

プーターローはこれからも、ずっと一緒にいてくれる。

彼女はそんなことを考えているのではないかと、進一は思いをめぐらせていた。

布団をかぶって目を閉じて、アナログ時計の乾いた音に耳をすました。淡々としたリズムに変化はなく、理香の姿がはっきりと浮かんでくる。いつも不思議に思うのは、最後に見た舞台が、真っ先に浮かんでくることだ。舞台上で輝く理香がいて、一緒にいるときの理香は、いつも遅れてやってくる。

まだしばらくは、理香に会うことなんてできないだろう。

寂しさと自己嫌悪で、実際、朝は最低の気分だった。邪魔だけはしたくないのに、弱い自分が空しさを訴える。あらゆるものが無意味で、どこにも価値を見出せない。理香のそばにいないのなら、どうやって生きていけばいいのだろう。理香のことを想うほどに、生きていく意味がわからなくなる。

彼女は、また来るだろう。

プーターローに会うために、来るなどいつても来るはずだ。

きつとまた騒々しくなる。

けれど、それを期待しているのが自分でもわかる。

帰るときは、送っていかないとダメだろうな。そうしないと、こ
つちが心配だ。

西園寺、文恵か。

おもしろいね。

気がつくのと、進一は目を開けていた。

目を開けたことすら意識しないままに、仰向けになって天井を見上げていた。

文恵のことを考えていて、考えていることに疑問符をつけて、漠然とした不安が押し寄せている。

胸騒ぎがして眠れない。

なにがこんな不安なのか、それもわからない。

彼女はおもしろい。興味深い。柴田の気持ちがわかるほど。だから気になって考えていたはず。いや、というより、思い出すのが当然だ。今日起こった出来事は、どれも印象が強烈すぎる。

もっともな理屈で説明がついて、納得している自分がいる。だが、それでも不安は残っていて、納得していない自分が奥底にいる。不安が存在感を増していく。あのときに似ていると、高校時代の記憶が進一に訴えていた。相手のことがなんとなく気になって、つい考えってしまうことなら、以前にもあった。

進一は溜め息をついて、文恵の姿を思い浮かべる。

「……惹かれてるのか？」

口にして後悔した。

力をもった考えが、正当性を主張する。

「そうじゃない」

同じように言葉に出して、進一は惹かれているという考えを否定した。

印象が強いから、思い出すのは当然だ。それに彼女はまた来る。期待している。理香に会えない寂しさを、彼女が忘れさせてくれることを期待している。そうだ。さっきもそうだった。彼女のことを考えていれば、理香のことを考えずにすむ。

進一は、だから彼女のことを考えていたと、結論を出してみた。それで間違っではないはず。しかし、理香のことを考えないようにはしていたという結論は、文恵に惹かれているという考えを否定するものではない。文恵に関心があるのはたしかだが、異性としての興味なのか、単なる好奇心なのか、はつきりしない。一体どうすれば、惹かれているという可能性を消し去れるのか。進一は天井を睨んで考えをめぐらす。

理香を知ってから、別の女性に惹かれたことなんてないのに……。可能性を消し去れないまま、不安は高まり心が乱れる。

なにに不安を感じているのか。

なにを恐れているのか。

考えをめぐらして、ずっと前から考えないようにしていたことを、進一は思い出した。

理香にとって、必要な存在じゃないのかもしれない。

進一は大きく息を吐いて、少しは落ち着けと自分に言いきかせた。

彼女に惹かれていると、瞬間的に意識せず気づいたのかもしれない。だが、それを恐れているのか？ たとえ惹かれているのだとしても、好奇心と区別がつかない程度なら、たいしたものじゃない。

理香に敵うはずもないのだから、どうなるわけでもない。一番怖いのは、理香を失うことだ。たとえ必要とされていなくても、理香をあきらめることなど、できるはずがない。

冷静になれば、天井を睨むのはやめた。

進一は目を閉じて、胸騒ぎも無視して、理香のことだけを考えるようにした。

会えない寂しさがこみあげてくる。しかし、二度と会えないわけではない。一緒にいるときのことを思い出そうとして、浮かび上がるのは、心に強く刻まれた思い出。出会った日のこと。ずっと一緒にいるのだと、心から感じたときのこと。

進一は落ち着きを取り戻していった。

胸騒ぎが静まるにつれて、なにに不安を感じていたのかを、すつと理解する。

進一は力なく笑って目を開ける。

理解はできても、納得はできない。頭の後ろで手を組んで、天井を見上げて考えるしかなかった。

理香のことを考えないようにしたのは、理香を忘れようとしているからか？

進一は上半身を起こして、そうじゃない、と頭を振った。

忘れられるわけがない。

黒いブラウンテレビのうえに置かれたアナログ時計を見て、進一は確信する。

理香を忘れることなんてできない。理香のそばにいたいと、いまも心から願っている。

それなのに、空っぽになった心の一部が、理香の代わりを求めている。

心の奥底で、理香を失いそうな予感がしているから。

アナログ時計は変わりなく、淡々としたリズムで乾いた音を響かせていた。

ずっと時計をながめていた進一は、携帯電話を探す。
やがて手にした携帯電話を、そのまま手放すことはできなかった。

16 嘘と現実と猫の受難

携帯電話が騒がしい。

理香はため息をついて、仕方なくバームクーヘンを平らげた。

鳴り止まないメロディを止めるために、ソファアを離れる。ティーブルで震える携帯電話を手にして、一瞬で、身体が熱くなる。

進一が呼んでいる。液晶画面には間違いないく、『佐山進一』と表示されている。

理香は疑問を抱くよりさきに、呼び出しに応えていた。携帯電話を耳元にあてて、相手の声が聞こえるまえに、恋人の名を呼んでいた。

「ごめん、理香。いま大丈夫かな？」

「うん。いま部屋にいるから、ぜんぜん平気。でも、どうしたの？めずらしいよね、進一が電話くれるなんて。ものすごい久しぶりでしょ？」

「このところ、理香、がんばってるからな。こっちから電話して邪魔はしたくないよ。こんなふうに話していると、あとで怒られるだろ？ 役になりきれなくて」

「昔の話ですよそんなのは。いまはもう、すぐに役に入っていけます。あっ、いま進一笑ったでしょ？」

「ごめんごめん。でも……いや、なんでもない」

「もう、まだ笑ってる」

「ああ、笑えてる」

「そんなに信じられないなら、また劇場まで見に来てよ。いい演技、するから」

「いい演技か……出入禁止、解かれてないよね？」

「うん、団長が手をまわして、ほかの劇団にまでブツラクリストの扱いになってた」

「あの人そこまで徹底してるのか？」

「うちの団長、ほつといたらどこまでもいくからねー。なんとかするには、進一がいても大丈夫っていう証拠を見せないとダメだと思う。だから、どう？　ここはひとつ、強攻策でいってみない？」

「やめとくよ。もしも強硬手段なんかやって舞台に影響がでたら、劇団の人たちにも全力で拒まれるような気がする。まあ、いまでも十分警戒されてるか。最前列に座って見たとき、理香のアドリブが激しすぎてすごいことなったから」

「あー、あつたねーそういうことも。でも、あのときはほら、いい役もらえて、緊張してて……うん。なんかもう、進一がじっと見てくるから怒ってる表情をつくれなくなって、無理やりハッピーエンドにもっていったんだよね。みんなが協力してくれなかったら、観客席から硬いもの投げられたと思う。はは、あとですっごく怒られたよねー、進一も一緒に」

「さすがに、全員から睨まれたくはないな。あんなことは二度とな

いいとは思っけど、やっぱり劇場には行かないほうがいいと思う。怒りとか悲しみとか、難しい演技を求められてるときは、舞台のことだけを考えたほうがいい。会わないほうがいい演技をするのは、素人でもなんとなくわかる。……いまだから言うけど、理香にも黙って、こっそり見に行ったことがある」

「えっ、ほんとに？ もあ、なんで言ってくれないのー？」

「なんでって、危険だから。もしも理香に見つかって、役から離れたりしたら大変だろ？ それに……一度、見ておきたかったから。ずっと会わないでいた理香が、どんな演技をするのか。劇場まで見に行ったのは、あれが最後だな。あとで団長に見つかって、危険だから二度と来るなって、念をおされた。……悪女の役なんて理香には似合わないと思ったんだけどなあ。なんだか、かつこよかったよ」

「……進一」

「役になりきって、観客をどんどん芝居の世界に引き込んでいて、ああいうのを、いい演技っていうんだろうな。見てきたなかで、一番いい演技をしたと思う。きつと、舞台のことだけ考えて、集中すればするほど、理香はいい演技をするんだよ」

「……ちゃんと、見ていてくれたんだ」

「ごめん、ずっと黙ってて」

「……やっぱり、会わないほうがいいのかな」

「たぶん、そうなんだと思う」

「そっか……なんか、くやしいな。……でもね、進一。舞台に集中するようにつて気をつかってくれるのはいいんだけど、たまには声くらい聞かせてよ。めちゃくちゃうれいんだよ、こっちは」

「……それ、すごくわかる」

「うん？ なにが？」

「こっちも理香の声が聞けてよかったってこと。……あーあ、団長との約束、破っちゃったな」

「どうでもいいよ、そんなの」

「いや、理香には舞台のことだけ考えて欲しい。邪魔だけはしたくないんだ」

「だいじょうぶ、平気だって。なんなら誓ってもいいよ。明日の舞台練習では、役作りに失敗しませんーって」

「ほんとに大丈夫か？ けっこ悲しい役なんだろ？ 笑顔とか厳禁じゃないの？」

「だから、心配ないって。そんなに疑うなら、これから毎日電話しちゃうよ？ 話したいことがどれだけあると思ってるの？ 毎晩夜明けまで寝かさないよ？」

「わかったわかった。こっちが悪かったから。信じるよ。理香のこゝと信じてるから、今日はもう寝るよ」

「ええー、もうーおー」

「なんていう声を出すんだよ。こっちが恥ずかしくなるじゃないか」
「だって、そっちから電話しといてさあ。今日ぐらい徹夜でもいいんじゃないの？」

「いいわけないじゃないか。どれだけ舞台から意識を離すんだよ。それに、寝ないで稽古に出たらフラフラになるんだろ？ 理香はもう、少女Bとか村人Cみたいな端役じゃないんだから。ああ、なんかもう、電話したの後悔してきた」

「もう、しょうがないなあ。進一は真面目すぎるんじゃない？ 私だってプロだよ？ うちの劇団の看板役者ですよ？ 体調管理が大変なことも、徹夜がダメなものもちゃんとわかってる。でえーもおー、もう少しぐらい恋人と恋人気分を味わっても罰はあたらなないと思わない？ あっ、そうそう。進一ってえ、猫は好きかなあ？ ……進一？ どうかした？」

「ん？ いや、なんでもない。ああ……ごめん。猫は、あまり好きじゃないんだ」

「へえ……そうなんだ。なんか、以外かも」

「で、猫がどうかした？」

「ううん。なんでもないなんでもない。たいしたことじゃないの。ほら、団長がさ、猫のモノマネとか考えてるから、それを思い出しただけ。でも、そっか、進一は猫のこと苦手なんだ。なんだろ？ 犬が好きな人って、猫は嫌いなのかなあ？ 進一ってかなりの犬好きだもんね。タローが死んじゃったときとか、ずっと泣いてたし」

「まあ、嫌いってわけじゃ、ないんだけどね。……いや、泣いてないから」

「ええー、泣いてたじゃない」

「いや、ぜんぜん泣いてない。理香の記憶違いじゃないか？」

「いーえ、ぜったい間違ってます。進一が涙を流してさあ、もらい泣きして、ふたりで一緒に泣いてたでしょ？」

「そう、だっかなあ？」

「ふーん、そう。認めないんだ。じゃあ思い出せるように、最初からぜーんぶ、話す？」

「するわけないだろ。しなくていい、そんなの」

「じゃあ、認める？」

「はいはい、認めます。たしかに、ちょっと泣いてたと思う」

「ちょっと？」

「もういいだろ？ まったく、なんでそんなこと覚えてるんだ」

「だって、泣いてる進一を見るのなんてあのおときだけだもん。忘れられない思い出ランキング、ベスト5には入ってるの」

「はあ、もういいや。じゃあ、そろそろ切るよ」

「ええー、もうーおー」

「だからそんな声を出すなっの」

「ひどいなあ、進一から電話しておいて」

「……舞台が終わるまでは、また電話もやめとくよ」

「ほんとに、これで終わり?」

「理香には、舞台上で活躍して欲しいから」

「じゃあ、ほんとに終わりなんだ」

「……ごめんな。もうずっと、理香だって電話しないようにしてたの」

「それは……」

「……理香」

「……」

「今度は、いつ会える?」

「……うん。今度の公演は、どうかな? 評判がいいから、長引くかもしれない」

「そっか。まあ、人気があるのは、いいことだと思う」

「また、メールするね」

「ああ、楽しみにしてる」

進一の声が届かなくなつて、理香は耳元から携帯電話を離した。いつもより、鼓動が早い。胸の高鳴りを感じながら、落ち着くように呼吸を意識する。本番前の舞台と同じように、心を静めてゆく。プロの役者として、明日の舞台練習に気持ちを切り替える。ちょうどいい。演じる役と、状況は似ている。

いまは、幕が上がる直前のステージ。

いま、恋人の声が途絶えた。

幕が上がる。

愛しさと、切なさ。

観客席に向かい、嘆きの表情を浮かべて、その場に足下から崩れ落ちる。

「うん。ムリ」

理香は携帯電話をつかんだまま、緩みっぱなしの頬を両手でおさえつけた。

寂しくもある。切なくもある。ただそれ以上に、うれしくてしかたがない。崩れ落ちるところではない。団長の命令など無視して、いますぐ進一の部屋まで飛んでゆきたい。雨だとか、冷たい地面だとか、考えられるわけがない。部屋に雨など降るわけない。床はフローリングであたたかい。

「もう、どうしよー？ これ明日とか危なくない？」

理香は危機感のない表情でぶつぶつと独り言を繰り返す。

ソファーでは、バームクーヘンを食べ終えたキャラメル色の猫が、蜂蜜色の瞳を細めていた。

猫のあくびに気づいて、理香はようやく猫の存在と、進一とした会話の内容を思い出した。

あわててソファアに近寄ると、ふくよかなキャラメル色の猫に悩みをぶつける。

「プーちゃん、どうしよう？ 進一、猫は苦手なんだって。このソファアにふたりで座って、プーちゃんの肉球と一緒にぶにぶにしたかったのに」

理香に肉球を揉まれながら、プーターローは小さくゲップをした。

「んー？ 今日はいつてもより食べてないのに、もうお腹いっぱいなの？」

理香はソファアに座り、プーターローを抱えて膝にのせる。

猫の缶詰を見せても、反応することは多くない。今日にいたっては、スイーツにも反応は薄かった。

「いつもどこで食べてるの？」

理香の質問に、プーターローはあくびで答えた。

理香は眠ろうとする猫をやさしく撫でながら、バームクーヘンは嫌いなのかなあと、考えてみる。

プーターローにも好みはあるのかもしれない。だとしたら、プリンはどうだろう？ 劇団の後輩に聞いてみても、猫がスイーツを好物だとは知らなかった。進一も知らないかもしれない。猫がプリンを食べると知ったら、進一だって気に入るかもしれない。

やたらと長い尻尾が、ぽふぽふと太腿をはたく。

「うん。いける」

理香はプーターローを抱えたまま、まだ見ぬ未来へと想像をふくらませた。

「いつしよに暮らさないか？」

と進一は言った。

はじめての主演舞台が成功して、引越しについて話している途中だった。

そのときすでに、お互いの部屋には行かないよう、団長から命令が出ている。

余裕があるなら会ってもかまわない。しかし、理香は劇団のスターであり、恋人の存在などファンに知られていいものではない。ホテルならまだしも、部屋に泊まるなど言い訳のしようがない、と。

団長の命令を、進一が忘れていたはずはない。

進一の提案に戸惑いをおぼえながら、「ダメだよ、そんなの」とすぐに答えていた。反射的な答えで、ふかく考えた答えではない。会話の流れは、役者としての今後の生活だった。流れのままに答えたあとも、進一の考えがわからなかった。

進一はとても自然で、いつもどおりに微笑んでいた。

「冗談だよ」

と言ったあとも、進一はやさしく微笑んでいた。

進一と同居なんて、役者を辞めるのに等しい行為だ。

団長を裏切るからではなくて、問題は、まともな演技ができなくなる。それくらいに自覚はある。進一といっしょに生活したら、素で舞台上がらないといけない。進一と付き合いはじめたときはそうだった。明るい役しかできなくなり、どの役をやっても、なにも変わらないと言われてしまう。演技力に自信があつたぶん、傷ついて、傷ついたことをすぐに忘れるほど満たされていた。

それはそれで間違いなく幸せだと思う。けれど、役者として芽がではじめて、まぶしいほどの光を浴びて、栄光へと向かう道が目の前にあって、劇団のみんなからも期待されている。そして誰よりも進一が、役者としての成功を応援してくれていた。

だから、歩きたかった道を選んで、もうひとつの答えは、心の片

隅に残してある。

たとえ冗談でも、あとからあとから、うれしくてたまらなかった。団長には世話になってるから、むやみに命令を無視するつもりはない。けれどいつかは、恋人の存在ぐらいでファンが減らないように、そんな心配を団長がしないように、もっと実力をつけて名を上げて、劇団の人気も高めていきたい。

そのためにも、ひとつひとつ、公演をしっかりとやらなといけな

い。
ちよつと声を聞いたぐらいで、舞台に集中できないようじゃダメだよね。

進一といっしょにいても演技ができるぐらいの役者魂を發揮しなきゃダメ……。

理香は身体を揺り動かして、右へ左へとプーターローを振り回す。

「できるかなあ。でも、どうしようかあ」
しだいに勢いをつけながら激しく揺らした。ついには立ち上がり、うれしそうにため息をつく。

「ねえ、プーちゃんは どう思う？ 私はやっぱり団長が悪いと思うんだあ。進一と普通に付き合っていたら、私だって落ち着いた女になれたと思わない？ こんな遠距離恋愛みたいなのをしてるから、いつまでも出会ったときと変わらないうんたと思う。……えっ、なに？ 変わった？ 深まってるの？ この想いはどんどん深まってるの？」

理香はくるくると回り、プーターローに遠心力をかける。

ピタッと華麗に止まったときには、明日のことなど忘れ去っていた。

理香はプーターローをベッドに連れ込んだ。

朝になればシーツも布団も、コロコロテープで猫の毛をとらない

といけなくなる。

けれど、一人ではとても、眠れそうにない。

理香はプータローを抱き寄せながら目を閉じた。

出窓に置いたアナログ時計が、淡々としたリズムで思いおこさせる。

今度はいつ会えるだろう。進一の言葉を思い出して、プータローの受難は続いた。

プータローは薄く目を開けて、蜂蜜色の瞳をのぞかせていた。

眠りに落ちた幸せそうな顔をながめて、ため息のような息をつく。もぞもぞと動いていたが、理香のそばを離れたりはしない。

瞳を閉じて、もう一度小さく息をついた。

17 猫がいてもいなくても

西園寺文恵は、進一の連絡を待っているほど大人しくはなかった。進一がバイト先からアパートに戻ると、犬小屋の裏に隠れようとする、文恵がいた。

プータローは姿を見せず、文恵は肩を落として雑炊を食べると、キャットフードと牛乳プリンを部屋に残して帰ることにした。進一に慰められながら夜道を歩き、駅の改札口で進一に見送られる。

「プーちゃん、明日は来るような気がしてきました」

「それはなに？ 明日も見張りますってこと？」

別れる間際の宣言に、進一は苦笑する。

「来るなっかっていても来るんだろうな……じゃあ、犬小屋のなかには部屋のカギを入れておくから、部屋のなかで待ってればいいよ。テレビを見るなりコーヒーを飲むなり、好きになっかってくれ」

慌てはじめる文恵を見て、「牛乳プリンのお礼だ」と進一は笑った。

明日はプリンを持ってこないように告げて、進一は文恵と別れた。そして翌日には、文恵と早紀が部屋にいた。

進一が部屋に入ると、客たちが座ったまま声をかける。

「あっ、おかえりなさい。お邪魔してます」

「すみませんけど、先にいただいています。佐山さん、いつ帰らるのかわからなかったんで」

進一は何か言ってるつもりだったが、早紀の計略にしてやられた。

空腹を刺激する匂いが、進一に文句を言わせなかった。

帰ってきたならば、アパートの前に見たことのある軽自動車が駐車してある。進一も、そのときすでに早紀がいることを疑ってはいた。しかし、早紀と文恵という女ふたりが、初夏だというのに塩ちゃんこを食べているのは予想外だった。しかも文恵は酒まで飲んでいる。早紀はカセットコンロや土鍋をはじめ、食材はもちろん日本酒までも用意して、他人の部屋で勝手に鍋料理をつくったらしい。早紀は下戸であり、酒は飲めないが、脳内でアルコールが作られているんじゃないかと進一は唸った。

進一は黙々と食べつづけ、鍋は終盤を迎えていた。文恵が寂しげに手酌で飲んで、「プーちゃん、来ませんでしたね」と進一に愚痴る。進一は適当に相手をしながら、烏団子を噛みしめて味わい、冷酒をなめた。くやしいことに、じつにうまい。食べれば食べるほど、箸が止まらなくなる。

早紀は料理の感想を聞こうとはせず、してやっつたりの顔で鍋を仕切っていた。まともな手料理に飢えた男の評価など聞くまでもない。そして、理解していた。何も言わせないことが、貸しを大きくするのだと。

「今回はラーメンで締めますんで」と、早紀は土鍋に中華麺を投入する。

進一は箸を止めて、表情を曇らせた。

土鍋だけを見ている男を横目に、早紀は完全なる勝利を知った。

進一は文恵と杯を重ねながら、余裕に満ちた早紀をみる。

「で、柴田よ。なんでお前までここにいる？」

胃袋をつかんだ男の問いかけに、早紀はケラケラと笑った。

「なんでって、浮かれきった文恵を目撃したら気になりますよ。で、なんかあったんって聞いたら嬉々としてしゃべってくれまして、なんでも佐山さんとこのプータローは、初猫のプータローに間違いないとか。そんなん、ほんまやったら完全に化け猫ですよんか。うちかて会いたいですよ」

「化け猫じゃないよ天使だから。プーちゃんは天使だから長生きなの」

さすがに酔ってきた文恵が「そうですね？」と進一に絡む。

進一はうんうんと肯きながら、文恵の杯に酒をついだ。

「化け猫だとは思いたいけどね。実際は、ただただ生意気な野良猫だと思っぞ」

ぐいっと飲み干す文恵の杯に酒を注ぎたし、進一もちびちびと酒を楽しむ。

「そらそうでしょうけど、うちは夢見る乙女ですからねえ。可能性があるってゆうなら、拝ましてもらいたいもんです」

進一は何か言いかけたが、杯を乾かして頭をかいた。

「……で、ほんとうにそれだけか？」

早紀は勝者の笑みを隠そうともせず、進一の杯に酒を満たす。

「合宿のことですけど、文恵には、なんとしても参加して欲しいと思ってるんです」

見れば文恵はうつらうつらとしており、どうやら会話は聞こえていない。

「化け猫のつぎはツチノコか。まあ、あの直感力が猫以外のターゲットに通じるのかわからないけど、期待したい気持ちはよくわかる」

「さすがは代表」

「でも、強制はしたくない」

「いやいや、べつに嫌がつてるわけじゃないんですよ。ただ、プータローのことを考えると、渋る可能性も出てきたんです。そんなわけで、佐山さんも合宿に参加してもらえますか？」

「なんか、急に話が変わってないか？」

「いえいえ、佐山さんが合宿に参加したら、文恵もあきらめるはず
です。佐山さんの許可もなく、この部屋を使うことはないと思うん
ですよ」

「許可を出すな、ということか。いざとなったら、外でテントを張
るような気もするけど」

「それに、人手は多いほうがいいですから」

「そつちが本音か？」

「今回も参加率はいいんですよ。けど、佐山さんと一条の兄さん。
大自然研究会の双壁が両方ともおらへんと、やっぱり寂しいですし
ねえ」

四回生になって、大自然研究会の活動には距離を置いている。影
響力を減らしてゆくためであり、バイトの時間を増やすためでもあ
った。夏が過ぎる頃には、忙しくなるはずだ。奨学金があるとはい
え、稼げるときに稼いでおいたほうがいい。毎年恒例のツチノコ探
しも、今回は不参加を決めていた。

「打てる手はすべて打つ、か。……八代さん、これだけは本気だか
らな」

「どうしても見つけたみたいですねえ。ああ、そういえば言うて
ましたよ。いろいろ大変やけど、就職活動せんでええだけ助かって
るって」

早紀は進一に酒をすすめる。進一は頭をかくと、残っていた酒を
一気に飲み干した。つがれる酒をながめながら、ふっと笑って早紀
をみる。

「にしても、けっこう尽くす女だよなあ」

進一の言葉に、早紀は一瞬押し黙った。すぐにケラケラと笑い、
進一に告げる。

「そりゃ惚れた人には尽くしますよ。うちは夢見る乙女ですからね
え」

早紀はなめらかに語っていたが、ずいぶん嬉しそうな顔をしていた。

鍋セットを放置して、客たちは帰る。

早紀は動かない文恵を置いていこうとしたが、そこは進一が「ふざけるな」と一喝する。文恵を連れて帰ることになるが、そこは早紀が手伝いを求めた。仕方なく進一も車に乗り込み、いっしょに文恵のマンションに向かう。文恵を背負った進一は早紀に導かれ、猫グッズにあふれた部屋まで文恵を運んだ。

ベッドに寝かしたところで文恵が目覚め、水を求める。

大丈夫だとは思われたが、進一と早紀はしばらく文恵の様子を見た。文恵が自力でトイレまで動けるのを見届けて、二人は文恵の部屋を出る。出るときには、ふらふらと玄関までやってきた文恵が「今日はありがとうございました。また、明日もよろしくお願いします」と言った。

進一は、早紀の運転でアパートまで戻る。

送迎の礼をいうと、「とんでもない」という返事がきた。

「それでは、合宿の件、よろしく願います。今度よせてもらうときは、酒の肴も考えときますんで」

運転席から言い放ち、早紀は車を走らせて帰っていった。

何も言っていないが、進一の結論は出ている。そして、早紀はわかっている。間違いなくわかっているだろうと、進一は理解している。

「やれやれ、だな」

「どいつもこいつも、思った通りにはいかないらしい。笑うしかない」と、進一は苦笑した。

進一は部屋に戻ると、散らかった流しをみて見ないふりをした。いまは、プリンも食べれない。片付けるのもシャワーを浴びるのも、全部まとめて明日がいい。

睡魔の誘惑にしたがい、進一は敷いた布団に倒れこんだ。

眠りに落ちるのは早かったが、理香の声は思い出している。邪魔をしたかもしれないが、電話をして、声を聞いてよかったと心から思う。

漠然とした不安は消えてはいないが、いまではかすかなものに過ぎず、大きくなることもない。

理香に望まれているのなら、なにも怖くはなかった。

0 九回目のデート

華やいだ声が店内にあふれていた。

雑誌で紹介されたスイーツに惹かれて、多くの女性たちが集まっている。評判どりのおいしさに、店内のいたるところで歓声と賞賛が叫ばれていた。

「コーヒーのおかわりはいかがですか？ 本日は、無料でサービスさせていただいております」

誇らしげな女性店員に声をかけられて、

「それじゃあ、お願いします」
と進一は答えた。

店員は満足気な笑顔をみせると、正確な動きで進一のカップにコーヒーを注ぐ。

二杯目のコーヒーが注がれるさなか、理香が最後の一口を食べ終えて口を開いた。

「はあ、おいしい……」

名残惜しそうにつぶやいて、自分のカップを手にとり、

「樹里さんまで、あと二歩ぐらいあるけど」

と、さらりとつけくわえる。

「アップルパイも絶品なのか。すごいな、あの人は」

進一は微笑み、二杯目のコーヒーに砂糖をこぼした。

そばにいた店員が、進一と理香にむけてニッコリと笑う。だが、店員の力強い笑顔など、ふたりの視界には入っていないかった。

理香は進一に、照れているような笑みをむけて、砂糖とクリープがたっぷりに入ったコーヒーをおいしそうに飲んでいる。進一は、銀色のスプーンでコーヒーに渦をつくりながら、理香の姿をじっと見つめていた。

進一と理香は店を出た。

街路樹の淡い緑が、光を揺らしている。

ふたりは輝ける道をならんで歩きだした。出会って、二週間。ふたりの不慣れな歩き方では、まわりに気を配ることも難しい。ときに迷惑をかけ、ときに疎まれながらも、気づかずに歩いていた。

ふたりは駅前のアーケード通りに並んだ店をあちこち見てまわる。アンティークに興味があるわけではない。かわいいインテリア雑貨が欲しかったわけでもない。それでも理香は歓声をあげながら落ち着くことなく動きまわり、進一は理香だけを見ながらついてまわる。

目的などなにもない。

一緒にいられるのなら、それだけでよかった。

理香が立ち止まったのは、家電製品をあつかう小さな店舗の前だった。もちろん進一も立ち止まったが、同時に首をかしげた。店頭には在庫一掃セールと銘打たれたワゴンがあり、理香がワゴンにならないだ安っぽい商品のひとつに熱い視線を送っている、かのように見える。

理香って、そういうのが好きだった？

進一が問いかける前に、理香は勝気な笑みをうかべて進一を見ていた。

嬉しそうで、どことなく幼い表情をみせる恋人に、まっすぐ見つめられて、進一は言葉につまる。

何も聞けず、何もできないままに、腕をからめて引き寄せられて、進一はすべてをあきらめた。はじめての歩き方に頭をかきながら、

でもまあ、埋番と歩らつてくじやないんだ。

18 進一たちの過ごした日々

文恵の生活は変わった。

文恵は他人の部屋で窓から顔だけ出していたり、他人の部屋の壁際で静かに座っていたり、他人の部屋で無邪気に猫と戯れていたりする。

プータローが来ないときは、進一に慰められながら駅まで見送られた。

プータローが来たときは、キャットフードを与え、二人と一匹でプリンを食べる。プータローが出て行くと、どこへ行くのか後を追いつ、そのたびに見失い、進一に慰められて駅まで見送られる。

夕食はほとんど外食になった。

牛丼を食べていると、隣にすわる進一から「酒はやめておこう」と言われたりもした。

進一の生活は変わった。

猫探しの依頼がない限り、文恵は部屋にやってくる。

プータローを膝にのせた文恵に「講義がないときは、午前中から待ってますよ」と、得意気に語られてしまったこともある。

「非常食にもなりますから」

といった文恵の意見を聞き入れたわけではないが、収納スペースやキッチンには、缶詰やパツクの生タイプ、袋入りのドライタイプといった多種多様のキャットフードが占めるようになった。

帰ると文恵が部屋にいて、浮かれていたたり沈んでいたたりしている。

それが日常になった。

以前と比べて、プータローの訪問は減っている。

やってこないことに慣れてきた文恵は、食事をつくりながら待つことをひらめた。二人分の食事をつくれれば、迷惑をかけっぱなしである部屋の住人に対して、感謝の気持ちを形にすることもできる。一石二鳥の名案に思えたが、がんばって見た結果は悲惨だった。

「せっかく作つたのに、捨てるのはもつたい。いただくよ。ああ、大丈夫、問題ない。子どものところ、お前はもつと佐山家の胃袋に自信を持ってって、父親に言われたことがあるんだ。あれっていつだったかな？ たしか家族でスーパーに行つて、両親が半額セールの商品ばかり買ってたときだ。父親が賞味期限ギリギリの牛乳を選ぶから、子供心に疑問を感じたんだよ。誰も買わずに捨てられたらもつたいないだろ、とか言つてたけど、大人が嘘をついているのは子どもでもわかつた」

醤油が効いてるお汁粉のような肉じゃがを胃袋におさめて、進一は「つぎはカレーか、お茶漬けがいいな」とリクエストをつける。気をつかわなくてもいい、食事の用意なんかしなくてもいい、とは言えなかった。お願いをされた以上、文恵も断われない。翌日には無難なカレーが出来上がり、ふたりはようやく心苦しさから解放された。

失敗に傷ついた心はそれなりに癒され、食事の用意をしながら待つ、というアイディアは生きのびる。

文恵にも意地があつた。

「気をつかわなくてもいいよ」と軽く言われても、「趣味ですから」と軽く返すほどに。

「しゅみい？ 趣味と問われれば猫と答える文恵が、料理が趣味って言うてのけたん？」

早紀は驚きあきれたが、教えを請われては捨て置けない。けらけらと笑って快く引き受けて、文恵に料理の指導をはじめめる。あとになって「文恵に恩が売れるやん」と気づき、「よっしやいける」と自らが考案したチャレンジ料理を進一で試したりもした。

早紀は三度目の奇襲でプータローと出会っている。

「いやあん、めっちゃかわいいやん。うち、こんなん好きやわあ、ほんまに化け猫なん？」

プータローを文恵から取り上げて、早紀はふくよかな猫を抱きしめて騒いだ。

キヤーキヤーと猫を取り合う女たちの横で、進一は黙って芋焼酎を飲んでいいる。肉球に弾かれる以外、進一はプータローに触れたことがない。なぜ柴田にも無抵抗なんだ、化け猫がネコを被るんじゃないぞと、進一は気だるそうな半眼の猫に念を飛ばす。プータローは文恵と早紀に挟まれながら、前脚をまっすぐ伸ばし、進一を見ながらニギニギと鋭い爪を出し入れしてみせた。

早紀はプータローと触れ合えて満足したらしい。

文恵の上達が速かったこともあるが、いろんな趣味に忙しく、数えるほどしか来ていない。

プータローとの出会いは一度だけ。

進一たちとは違い、それだけの縁に過ぎなかった。

夏休みに入って早々、八代の祖母が住まう村落に、大自然研究会のメンバーが集う。

二泊三日の合宿。

目的はツチノコの搜索、および捕獲。

自由気ままなる大自然研究会のイベントにおいて、進一の誕生日会につぐ参加率の高さを誇る。

午前七時、進一以上に忙しいはずの八代は、日頃のストレスを発散するかのよう林道を駆けた。

そして、走りゆく熊のような巨体を、早紀が追いかける。

「とりあえず、あの人たちの真似だけは絶対にしないように」と代表からの注意喚起が行われ、文恵など他のメンバーがそろそろと進一のとをついて歩いた。

「あの先輩方は、毎回あんな感じなんすか？」

「いや、去年はみんな走ってたよ」

そんな会話がうしろの方でなされ、文恵は「そうなんですか？」と進一に聞いた。

進一は顔をそらしながら「こういうときは、孝雄がいないと楽だな」と独り言のような答えを返した。

かつて八代少年がツチノコを目撃した場所、そこから搜索は始まる。

単独行動はしないこと。

発見したら大声で呼ぶこと。

毒蛇や毒虫、熊やイノシシや転落事故などに気をつけて、なににより命は大切に。

進一が、それらの注意事項を早紀の口から言わせる。

文恵は、進一、早紀、八代の三人とともに行動した。

胴体の膨れたヘビのような生き物を探せばいいことはわかってい
る。だが、どうやって探せばいいのだろう。ぐるりと見わたせば、
カメラで撮影している者、ダウジングで真剣に探している者もいる
が、結局は猫探しと同じように、いろんなところを見ていくしかな
いのだろう。

文恵は深呼吸をして、街中では味わえない匂いを楽しんだ。気楽
にやろう、そう思ったが、

「文恵、頼んだで」

と早紀に正面から両肩をつかまれ、親友と同じような眼差しで進
一に見られた。熊のような巨体の大先輩から拜まれもした。

まったく集中力が出ないまま搜索を続けて、文恵は地図に目を落
とす。

ぼたぼたと汗が落ちて、ため息が出る。

八代先輩のおばあさんが作ってくれたおにぎり、おいしかったな
あ。

そんなことを考えながら地図をながめていると、早紀と進一が背
後に立っていた。

「どのへん？ どのへんにおるの？」

と勢いよく迫られて、「このへん、かなあ」と、とっさに目につ
いた場所を指さした。

文恵が指さした場所は、広々とした場所だった。かつて蕎麦など
の雑穀が栽培されていたようだが、いまはもう背の高い草だらけで、
ただの荒地になっている。畑であった荒地の入り口は、もう少し坂
道を下ったところにあるらしい。四人が立っている場所には、一メ
ートルほどの段差があった。

「こりゃあ、うかつに入ると毒蛇に噛まれるかもしれんな」

広々とした草むらを見わたしながら、八代がまともな発言をした。

文恵を除く三人が、どうやって草をなぎ払っていか相談していると、ガサガサと音がきこえた。

四人が草むらに注意をむける。

と、前方3メートルほどの場所で、何かが跳んだ。草むらの上を、それっぽいの跳んだ。

目撃した数瞬の後、進一の身体にゾクゾクとした感覚が走る。

震えるままに草むらに突入しかけたが、八代の雄叫びで我に返った。進一以上に興奮していたのであろう八代が、咆哮をそのままに巨体を草むらのなかへ飛び込ませる。

「ちよつ、八代さんダメですって」

そんな進一の声など届くはずはなく、早紀が高らかに笑い声を上げた。

気配を追いかけているのか、八代はどんどん遠ざかる。進一は八代の暴走が止まらないと判断を下し「とにかく見失わないようにするぞ」と言ったが、言ったそばから早紀が叫び声をあげて草むらに入った。進一は力なく頭を振ると、「君はここで待っていてくれ」と文恵に告げた。

文恵は、散らばっていた他のメンバーが駆け寄ってくるころには、落ち着きを取り戻していた。

それっぽいのがいたことを伝えると、みんな我先にと草むらへ入っていく。文恵は笑いをこらえながら、進一の言いつけどおりに動かず、ずいぶん遠くへ行った三人の姿を探した。

暴走する八代に、一緒になって駆けていく早紀。そのふたりを追いながら、時々こちらの方角を確認する進一。

「ほかの人たちまで動きまわっちゃって、ほんと、いろいろ大変だなあ」

せめて一人くらい、佐山さんの手伝いをしなきゃね。

文恵は大きく伸びをして空を見上げた。

陽射しが熱くてたまらないのに、太陽に向かって笑顔があふれた。

ツチノコの捕獲はならなかったが、一人として命を損なうことなく、全員無事に帰還を果たした。

少年時代の自分は間違っていたと、八代は号泣しながらツチノコ目撃談を熱く語り、後輩たちに酒を勧める。とくに文恵には酒を勧めて、何度となく手を合わせて功績を称えた。

熊のような巨体の先輩が感涙にむせて、あの柴田早紀が、興奮のあまり酒を口にして倒れた。まっとうに思われた新顔も、信頼のける佐山代表さえも、ツチノコのようにだったと語っている。

やはり、いる。ツチノコは絶対にいる。

ほかの研究会メンバーも興奮は最高潮に達し、明日の搜索成功を祈って大いに酒を酌み交わした。

親友や進一たちに喜んでもらえれば、文恵も気分はいい。もともと早紀の推薦ということで一目おかれてはいたが、今回の功績で、文恵はもっている人として敬われた。文恵は、未知との遭遇への協力はていねいに断わりつつ、猫探しの魅力を語りだす。

進一の気分も上々だった。身体は疲れきって眠たくもあるが、ツチノコらしきものを目撃したときの興奮を思い出しながら、戦線を離れて同志たちの狂騒を見回す。意識を取り戻した早紀と「孝雄の悔しがる顔が見ものだ」と語り合い、猫探しの人員確保に乗り出した文恵をみて酒を噴き出した。文恵と早紀にどれだけ背中を叩かれようが、腹を押さえて遠慮なく笑った。

翌日、ツチノコ搜索は中止となったが、誰一人として文句は言わなかった。

進一が恋人との再会を果たすには、もうすこし時間が必要になる。

文恵は帰省もせず、猫探しの依頼がない限り、変わることなく進一の部屋にやってきた。

料理の腕に自信を持ちはじめ「ごはんって、土鍋で炊くとおいしいですよ」などと語るほど食事作りを楽しむようになっていく。プーターローがいなくても、沈んでいる文恵はもういない。

進一の生活は変わっていた。

文恵が部屋で待っている、それが日常になっていた。

恋人でもない異性と、毎日のように食卓をともにする二人。

なんなんだこれは思いながらも、進一は文恵がいる日々を重ねていった。

退屈で空しい時間は消えたが、少しずつ、ざわつく思いがこころに降り積もる。

これでいいのかと、進一は悩んだ。

彼女はプーターローを待っている。でもいまは、それだけを待っているわけじゃない。

これでいいとは思えないが、プーターローが来ていると、彼女は食事作りを途中で放棄して遊んでいる。彼女は猫に会いにくる猫好きの後輩であって、それだけに過ぎない。拒絶するのも、なにか違うような気がする。

進一は部屋のドアを開けて、文恵がプーターローと戯れている姿を

見ると、安心して笑えた。恋人でもない相手が部屋で待っている、そんなことを考えることもなく、微笑むことができる。

文恵が一人で待っているときも、笑えないわけではない。楽しんでいないわけではない。

部屋に文恵がいないときは、それなりに寂しさを感じてもいる。心境は複雑だった。

進一の口から、文恵に恋人の存在を伝えたことはない。

文恵との会話は、ほとんどが猫に関するもので、いつも進一が聞き手にまわっている。

たとえば休日の過ごし方でもいい。もしも文恵が、進一にプライベートを尋ねていたとしたら、進一は恋人の存在を教えていたかもしれない。照れながらも、理香がどれだけ魅力的な女性であるかをポツリポツリと長々と、うれしそうに語ったのかもしれない。

だが、文恵はなにも問いかけなかった。

文恵は自分から聞き出して、進一のことを知ろうとはしなかった。そして、尽きることなく猫を語る後輩に対して、進一は何も言い出せずにいた。

なんでもない相手に、こっちから理香のことを伝えるのはおかしい、よなあ。

いきなりそんな話をされても、彼女だって困るだろう。自意識過剰な男が、勘違いするなよ、と言ってるようなものだ。おもいつきり警戒されて、お互い、心に傷を負うような気がする。

進一は、文恵の存在が自分のなかでどのように変化しているか、気づかなかつたわけではない。

だがそれは、理香の代役を求めているだけなのだと考えていた。

理香のことを想い、理香の声を思い出せば、すべての不安が力を失う。文恵に近づこうなどと、一度も思ったことはない。だが、ただ

の後輩だと意識するあまり、遠ざけることもできないでいた。

文恵がいて、ときどきプーターローもいる生活。

プーターローは、よく文恵の膝のうえでくつろいだ。

進一が呼んでも無視するが、文恵が呼べば寄っていく。

進一にはまったく触らせないが、文恵が撫でればグルグルと喉を鳴らした。

文恵は膝のうえのプーターローをやさしく撫でる。

プーターローに向けられる眼差しと微笑みは、どこまでも暖かい。

進一の目に映る、一枚の絵。

それはとても、心地のよい情景だった。

大学からの、いつもより遅い帰宅。

進一はカギをまわしてドアを開けた。真っ暗の部屋には誰もおらず、密室だった部屋には猫もいない。

部屋の明かりをつけて、テレビのうえに置かれた時計をながめた。夕食はすでに済ませている。あとはシャワーを浴びて寝るだけだ。もともと、布団に入っても眠れるかはわからない。明日が待ち遠しいときは、疲れがあっても眠れないものだ。

半日にも満たない時間とはいえ、久しぶりに理香と会える。

進一は携帯電話を取り出して、新たにメールが届いていないかを確認した。デートのキャンセルはないと、いったい何度確かめれば

気が済むのだろう。自分の行動に笑ってしまふ。

荷物を置いて、部屋の換気をするために窓を開ける。

プーターローは今日も来なかったのだろうか。

小さいほうの窓を開け、久しく現れていないキャラメル色の猫が思い出され、網戸を開ける。

プーターローの訪問は減った。

だんだん減ってきているのはわかっていた。いずれは姿を見せなくなる、そんな気がしている。

「どう、思っているんだろうな」

進一はつぶやき、文恵を思った。

このところ、すこし元気がないように感じる。やはり同じことをプーターローがいなくなることを考えているのかもしれない。昨日も猫探しの前日には頼りない気がした。

(明日もがんばってみます)

そんな一文が、進一の脳裏によみがえる。

文恵から送られてきた最後のメールには、探している猫が見つからないと書かれていた。前回と同様、猫探しに時間がかかっている。早紀や研究会のメンバーも手伝ってはいるが、それでもなかなか見つからない。

前回の猫探しが終わったあと、文恵は少し気を落としているように見えた。

「ずいぶん苦労したようだけど、なにかあった？」

慰めるような進一の問いかけに、文恵は首をよこに振った。

「なんだか、勘がうまく働かなくて」

文恵はそう言って、ただ寂しそうに笑っていた。

あの直観力が鈍った。柴田も悩んでいたが、考えられる原因はなんだ。勘が働かない、働かせたくない？ 自分の直感を信じたくないようなことがある、とすればプーターローしかいないか。プーター

ーがいなくなると感じていながら、それを認めたくないのかもしれない。

進一は文恵を思い、行方の知れないキャラメル色の猫を思った。いったいプーターローはどこにいるのだろう。つぎに来たときは、本気で後を追いかけてみようか。

「ツチノコの呪いを気にして責任を感じてるヤツもいるんだ。後輩たちに、あまり心配させるなよ」

囁くように文句をいって、進一は小さく笑った。

いなくなると寂しいのは、自分も同じかもしれない。

蜂蜜色に輝く光を少しだけ探して、進一は静かに窓から離れた。

19 待ちわびた人と

理香とプータローの生活は続いていた。

プータローは変わることなく、頻繁に理香のもとを訪れている。ドアの前に座って理香の帰宅を待ち、翌日には理香と一緒にマンションを出ていった。どうやってマンションの内に入ってくるのか不思議だったが、理香は一度だけ目撃している。なんてことはない。住人が出入する隙について、堂々と正面から侵入していた。確認はしていないが、理香の部屋がある三階まで、階段を使っていない可能性もある。エレベーターを使いこなしている猫がいると、マンション内で噂になっているらしい。

理香はプータローの訪問を心待ちにしている。

シヨコラ、バニラアイス、ムースババロア、バナナクレープ、苺のタルト、モンブラン、マンゴープリン、シュークリーム、チーズケーキ、などなど。

理香が愛するスイーツたちを、プータローはともに愛した。

理香にとってプータローは、進一につづく新たな甘味仲間でもあった。

「プーちゃんはスイーツを狙って私のところに来てるんでしょ？」
と、理香はケーキ皿を片手に、ふくよかなキャラメル色の猫に聞いている。

プータローはちらりと質問者の顔を見たが、何も答えず、理香の膝でティラミスを見上げていた。

キャットフードを欲しがらないときもスイーツは食べる。そんなややこしい猫とともに味わうスイーツタイムは、間違いなく、理香にとって幸福の時間だった。

プーターローとの生活に不満などなかった。
あえて不満をあげるとすれば、進一に話せなかったこと。それだけが心残りだった。

理香はコロコロテープを転がして、シートについた猫の毛を取りのぞく。時刻を知ろうとして、緩みっぱなしの表情がさらにふやけた。出窓に置いた時計はダメだと、作業を切り上げて寝室を離れる。ソファーに向かい、落ち着いているプーターローの身体をコロコロした。

意味のない行動であることはわかっているが、無抵抗なのをいいことに、なんとなくやってしまう。

「プーちゃんって、コロコロだけだよ。手間かかるの」

理香はプーターローのために、猫用のトイレも用意していた。猫のオシッコは恐ろしく臭い、という話を劇団仲間から仕入れて覚悟もしていたが、プーターローは理香の部屋で一度も排泄行為をしたことがなかった。

「いつも思うんだけどさあ、プーちゃん、オシッコとか、どこでしてるの？」

納得のいく返答はなかったが、気だるそうだった半眼は少し開き、蜂蜜色の瞳がキラリと輝く。

ニヤリと笑う猫を見た気がして、理香は寝不足の疲れ目をこすった。

客演をつとめた公演は好評のうちに終わり、理香の心は弾んでいた。団長が隙間なくスケジュールを埋めてしまい、午前中しか時間は死守できなかったが、久しぶりに進一に会える。

「いいかね理香くん。うちの公演は、当然、我が劇団のスターである君が主演の舞台だ。……聞いているか？ 聞いているのか？ ねえ、

お願いだから、聞いてください」

公演の打ち上げパーティーに混じっていた団長の隣で、完全に役者モードを離れた理香は、ずっと進一に会えたらどうするかを考えていた。

話したいことは山ほどある。でも、とりあえず最初に抱きついてみようか。見知らぬ人が通る街中でそんなことしたら、進一はどんな顔をするだろう。

舞台の成功もあって、理香は浮かれきっていた。

「明日の稽古はサボらないように。信じてるよボクは。稽古魔だからねえ、理香くんは」

理香はへらへら笑いながら団長の命令を聞き流し、どうしよう、そうしようと、ありえないイメージを広げていた。

理香はプーターローとともにマンションを出た。

いつものようにプーターローを見送り、理香は足早に駅へと向かう。通いなれたホームで電車に乗りこみ、通いなれた駅に降りて改札口を出る。進一との待ち合わせ場所は、駅から近いオープンカフェと決めていた。理香が稽古に遅れないように、進一がそうしようと提案していた。

理香と進一は、待ちわびた再会を果たす。

約束した時間より三十分も早かったが、期待通りに進一はいた。

恋人の姿を見つけたときから、理香の歩みは落ち着いていく。理香がゆっくりと近づいて、理香に気づいた進一がイスから立ち上がって、ふたりは向かい合う形で微笑みあった。

理香が昨夜から考えていたことは、すべて無駄になる。

手を伸ばせば届く距離で、ふたりは見つめ合うことしかできないでいた。

心配性だった若い女性店員が、突っ立ったままの客たちへ慎重に近寄り距離をつめる。視線を何度も往復させながら理香と進一を観察し、オーダーを問うべきか悩み、後悔で泣きそうになった。経験は浅くとも、責任感は強い。退くこともできないと意を決して、小さく繊細な声で注文をきいた。三回がんばって見たが反応は無く、四回目の挑戦で二人から同時に顔を向けられる。息がつまり、店員も止まった。

「座ろうか」

「メニューをくだ」

「う、注文は」

時が動き出し、三人はそれぞれに口を開いた。何事もなかったかのように、理香と進一は照れながら黙って席に座る。店員は胸をなでおろしてメニュー表を渡した。ぎこちない会話をはじめた理香と進一を交互に見ながら、こんな人たちもいるんだと、仕事を忘れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8869v/>

さよならキャット・スイーツタイム

2011年11月7日13時03分発行